

# プロレタリア独裁

全国の共産主義者は団結せよ！

## 綱 領

- I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命
- II 帝国主義と世界プロレタリア革命
- III 世界プロレタリア共産主義革命の時代と  
世界プロレタリア独裁
- IV 日本プロレタリアートの当面する政治的任務
  - (一) 一般的政治的分野で
  - (二) 対外および民族関係の分野で
  - (三) 経済の分野で
  - (四) 労働保護と社会保障の分野で
  - (五) 教育の分野で
  - (六) 部落解放の分野で

綱領論争の総括提案

インドシナ革命戦争の大勝利万歳！

—— 創刊号 ——

プロレタリア独裁編集委員会

## 全国の共産主義者は団結せよ！

全国の共産主義者、及び労働者諸君！

我々はここに綱領を提起する。

勿論、この綱領は、我々の基本的な政治的宣言であり、戦いの指針である。しかしながら、この綱領は、それに止まらない。

我々は、これを、わが国の労働者階級が闘い続けなければならない、また、近い将来必ず闘いとするであろう労働者革命党の、公然たる旗印として、提起する。

日本共産党が、現代修正主義に転落し、労働者階級の真の階級的利益を完全に裏切ってから久しい。この間、修正主義の破廉恥極まりない裏切りにも拘らず、わが国の労働者階級を先頭とした動労大衆の闘いは、特筆すべき前進を果した。同時に、共産主義運動も修正主義と断固として闘うなかで前進した。

確固とした革命党を建設するための試みも大いになされた。だが、しかし、この試みは、いまだ一つとして成功に導かれていない。労働者階級を代表する政党は、今日、わが国ではいまだ打ち立てられてはいない。確固とした革命党を打ち立てることは、従って、わが国の共産主義者にとって、依然、第一の任務となっている。現在、わが国においては、中小の共産主義者の分派、サークル、革命的労働者のそれが無数に存在する。同時に、その数に応じて理論と実践がある。これらの諸組織の主張と実践は、確かに、その多くが真剣を試みであることには違いないが、真に革命的、即ち、労働者階級の解放闘争を成功に導き、世界プロレタリア共産主義革命を徹底して推進するものではないことはできないであろう。そうではなく、根本的な思想、基本的政治的立場、組織、戦術問題全体にわたって、動揺しており、曖昧であり、不十分であり、誤っている等々の状況にある。

確固とした革命党を闘いとするには、このように幾つにも分裂し

混乱しているわが国の共産主義者の多くを統合する必要が無条件にある。しかしながら、そのためには、先ず革命的理論を闘いとり、思想的曖昧、政治的混乱からぬけ出さねばならない。革命的理論なくして、強固な革命党はありえない。

だから、数多くの共産主義者及び革命的労働者の分派、サークルを統合し、強固な革命党を闘いとすることを追求する我々は、統合するために、その政治的結集軸を提案することを、自己の不可欠の任務と考えた。統合する前に、また統合するためには、まず政治的分界線をきっぱり引かなければならない。我々が、ここに提案する綱領ではこれらの内容が、具体的に簡潔に、力強く述べられている。

我々が、この綱領を闘いとするに至った経過を述べよう。

我々は、組織的継承性からすれば、日本共産党から出発し、続いて共産主義者同盟を組織し、また再建し、共産主義者同盟赤軍派の創立と再建を担った。

一九五〇年代の末、日本共産党は、動揺し流動的情況にあったが、既に現代修正主義への転化が動かしがたいものとなっていた。これと訣別し、新たな革命党を組織し、マルクス主義の旗の下断固闘うことが、不可避の任務となっていた。共産主義者同盟は、この歴史的任務を、先ず果さんがために組織された。共産主義者同盟の意義は、何よりも第一にこの点にある。

共産主義者同盟は、帝国主義の相対的安定期の動揺がはじまる中で、世界革命、暴力革命、プロレタリア独裁の旗をかかげ、全国の労働者階級の前衛分子に革命党建設を訴えた。同盟は、中国、ベトナム、朝鮮における共産主義運動が、ソ連共産党を中心とした諸国の共産党が転落した現代修正主義と一線を画し、国際共産主義運動の新しい段階を切り開いてゆく傾向を評価し、プロ独国家、後進諸国、帝国主義国、それぞれの労働者階級、被抑圧

民族が団結して闘い、帝国主義を打倒すべき点を強調した。

同時に同盟は、日本帝国主義の復活、対外侵略を重視し、これに強く警告を発した。日本帝国主義の復活と同時に、国家及び社会のあらゆる領域での帝国主義的再編が進行したが、同盟はこれを容赦なく暴露し、自国帝国主義の国家権力と非妥協的に闘い、これを打倒すべきことを主張し、かつ実践したのである。帝国主義国家権力と非妥協的に暴力的に闘うことは、六〇年代後半の大衆的実力闘争、大衆の武装闘争の中で、同盟によって強固に貫かれたのだった。

しかしながら共産主義者同盟は、マルクス主義の根本思想を首尾一貫して強固におし貫くのではなく、往々にして小ブルジョア・イデオロギーと結びついた。同盟は、プロレタリア諸国（中国、朝鮮、ベトナム）及び、ソ連社会帝国主義の評価と両者に対する態度に於いて、両者を明確に区別しえず、「反スタ主義」の立場やら現実のプロ独に反対するなどの誤りを犯し、動揺をくり返した。又、同盟は、日本ブルジョアジーの経済的力の復活を即彼らによる国家権力の掌握と認識する誤りに陥っていた。そして、国家権力をめぐる闘争におけるアメリカ帝国主義の地位を正しく評価しえず、アメリカ帝国主義に対する態度においても少なからざる動揺をくり返したのであった。更に同盟は、しばしば先進国階級闘争を過大に評価し、民族解放闘争を過小に評価する傾向に陥り、又、我国の階級支配の具体的構造を全面的に暴露しえず、民主主義闘争の先進闘士たりえなかった。そして、同盟の結束は、マルクス主義の根本思想や基本的政治任務で主実現されてきたというよりは、往々にして闘争形態、闘争戦術の問題でなされた。同盟はまた、中央集権的な職業革命家を中心とした地下党を闘いとするに曖昧であり、大衆組織内の左派フランクシヨンの連合体としての組織から脱却することはできなかった。これらの誤りと動揺は、小ブルジョアに独特のものである。即

すというよりは、遙かに小ブルジョアの憤激の自然発生性への拜跪であった。

かかる小ブルジョア性が、七一年末、赤軍派を解体し、政治原則での一致を基にせず、日共革命左派（神）と合体し連合赤軍を生み出し、尚かつ連赤内部での個人修養論による同志殺害をもたらした根本的要因に他ならない。赤軍派は国家権力の執ような強烈な弾圧におし込められ、おしつぶされていくと同時に、自らの政治故に自壊したのである。

赤軍派の再建は、自ら陥ってきた小ブル共産主義の軍事第一の傾向を革命的に克服する努力から始まった。この時期の政治的特質は、自らの政治的立場を徹底してプロレタリアートの政治的立場に変革し、労働者階級の中に確固とした地盤を打固めることへの集中にある。

この中で、まず再建赤軍派は、科学的資本主義批判を闘いとり、これを自らの全実践の基礎とすべく努めた。資本主義に対する科学的批判こそ、唯物史観、階級闘争に対する理論と共に、科学的共産主義の根本理論を形成するものに他ならない。同時に、再建赤軍派は、口先だけでマルクス主義をとるのではなく、労働者階級の解放は労働者階級自身の手によってのみ果されるという基本観点を厳格に実践に貫くべく、労働者階級の中に現実の地盤をうち固め、彼らの解放闘争の能力をたかめ、反抗の力を組織すべく精力を集中した。この実践において、とりわけ本来のプロレタリアの下層に対する働きかけが重視された。ブルジョアの上品さにそまっていらない本来のプロレタリアの下層にびびかけ、働きかけること、ここに日和見主義との闘争の一の核心がある。

更に再建赤軍派は、わが国における階級支配の具体的現実を暴露し、部落差別に対する闘いを自己の差別的現実を克服することから始めた。それは日本帝国主義の差別・分断支配、排外主義攻撃に対する我々の闘いを、理論的、実践的に深化させるものとな

ち、かかる限界は、共産同が、労働者階級のみが、今日の社会でブルジョアに對し唯一革命的であることを曖昧にし、労働者階級の中に確固とした地盤を形成することに精力を集中するのでなく、小ブルジョアと曖昧に手を結んできたことと密接に結びついている。

だから、こうした弱点が、国際共産主義運動が前進し、帝国主義の相対的安定期が終焉を告げつつある時期に、諸階級の衝突が避けられず、事実、来たるべき革命の一回の哨戦として闘われた六八・六九年にかけての一大会戦の禍中で、全面的にさらけ出されたとしても何ら不思議ではない。

第二次共産主義者同盟は、この一大前哨戦の中で、軍事行動の一層の強化・再編によって前進を果そうとする傾向と、その対極に生み出された経済主義分派と、この二つの間での必然的な分裂を前に強固な党を願望し組織を保守せんとする部分とに分裂した。同盟の左派分派としての赤軍派は、武装闘争の一層の強化、前進と、革命軍の建設、国家権力の暴力装置の解体を掲げて登場し、それを忠実に実践に移した。幾つかの蜂起の試みが失敗し、幾つものゲリラ戦が遂行された。確かに赤軍派は、その主張と実践の中で圧倒的にブリミティブだがわが国における旧来の革命党の根本的変革を提起した。ブルジョア国家権力の機構の解体、政治権力の奪取を實際に組織しえる党を實際に組織すること、これである。

しかしながら、赤軍派は、マルクス主義の見地でこれを実現するのではなく、革命の原動力は、唯、労働者階級・人民だけであることを完全に明確にするなかで実践したのではない。そうではなく、赤軍派は、観念論的歴史観を基礎としたはなはだしい主観主義と、コスモポリタン主義と軍事第一の傾向に完全に陥りてきた。それは、党が軍を指揮するのではなく、党を軍に溶解し軍が全てを指揮した。それは、労働者階級の自己解放闘争の一環をな

った。

しかしながら、再建赤軍派は、権力問題を曖昧にし、かつ、組織的結束を政治的に厳格に実現し再建しなかったことによって必然的に分解した。

革命の根本問題は権力問題である。労働者階級は、先ず国家権力を闘いとらねばならない。そのためには、既存の国家権力の実態、性格が明確に暴き出されねばならない。また労働者階級はかかる勢力を引き寄せ、いかに国家権力を打倒するのか明らかにしなければならぬ。だから、労働者階級の手には国家権力を闘いをとることを当面の任務とする革命党において、権力問題は基本的政治、組織、戦術問題を貫く核心である。従って、権力問題を曖昧にするならば、プロレタリア独裁の思想を曖昧にし、共産主義者の目的意識性を削りくずし、大衆運動の自然発生性への拜跪を強め、革命家の組織を建設し打ち鍛えるのではなく、大衆運動の左派フランクシヨンを溶解されていき「計画された戦術」ではなく「過程として戦術」に陥っていかざるをえないのだ。

再建赤軍派は、自らの致命的限界に対する闘いを開始する中で分解した。即ち、旧赤軍派の根本的な政治的批判を回避し、その一定の手直しで進もうとする傾向と、政治問題をあいまいにし組織防衛を第一とする傾向と、自らの限界を革命的批判によって克服する道を選んだ我々との間にあった。

我々がそれをいかにしなかったか。それは綱領に明確である。そこでは徹頭徹尾プロレタリアート独裁の思想が貫かれていた。綱領は、正に今日までの日本共産主義運動の革命的批判の上にあり。それは「否定の否定」に他ならない。即ち、最初は現代修正主義の、次いで小ブル共産主義の、その種々の傾向に対する。

この旗印をかかげ、その下に強固な革命党を闘いとするならば、その時にこそ、労働者階級の勝利は確実となるだろう。

目

次

全国の共産主義者は団結せよ／……………1

綱領……………5

I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命……………6  
II 帝国主義と世界プロレタリア革命……………8  
III 世界プロレタリア共産主義革命の時代と  
世界プロレタリア独裁……………10  
IV 日本プロレタリアートの当面する政治的任務……………13  
(一) 一般的政治分野で……………14  
(二) 対外および民族関係の分野で……………16  
(三) 経済の分野で……………16  
(四) 労働保護と社会保障の分野で……………18  
(五) 教育の分野で……………19  
(六) 部落解放の分野で……………20

綱領論争の総括提案……………22

はじめに……………22  
綱領の形式と骨格について……………23  
I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命……………24  
II 帝国主義と世界プロレタリア革命……………34  
III 世界プロレタリア共産主義革命の時代と  
世界プロレタリア独裁……………34  
IV 日本プロレタリアートの当面する政治的任務……………61

インドシナ革命戦争の大勝利万歳／……………67

綱領

I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命  
II 帝国主義と世界プロレタリア革命  
III 世界プロレタリア共産主義革命の時代と  
世界プロレタリア独裁  
IV 日本プロレタリアートの当面する政治的任務  
(一) 一般的政治分野で  
(二) 対外および民族関係の分野で  
(三) 経済の分野で  
(四) 労働保護と社会保障の分野で  
(五) 教育の分野で  
(六) 部落解放の分野で



## I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命

① 一九一七年のロシア革命によって開始された世界プロレタリア共産主義革命は、様々な困難を経験したが、現在なお偉大な発展途上にある。この革命は、資本主義の発展、ブルジョアジイとプロレタリアートの階級闘争が不可避免的にもたらした結果である。

労働者階級の経済的地位は、資本主義的生産様式の支配しているすべての国々で同一であり、また、世界交通や世界市場の発展によってますます緊密に結びつけられているので、プロレタリアートの解放運動は、国際的な運動にならざるをえなかった。世界プロレタリア共産主義革命の始まりは、この結びつきを一層つよめた。

日本プロレタリアートの階級政党であるわが党は、自分をプロレタリアートの世界軍の一部隊とみなし、他のすべての国の共産主義者のめざしているものと同一の終局目標を追求する。

② この終局目標は、現代のブルジョア社会の性格とその発展行程とによって規定される。

資本主義社会では、自分の労働力以外に何も持たない賃金労働者が、生産手段を独占している資本家と大地主に経済的に隷属させられている。賃金労働者は、ある時間を経営報酬で資本家のために（従ってまた、剰余価値にたかる資本家の伴食者たちのために）働くかぎり、自分の生活のために働くこと、すなわち、生きることをゆるぎされている賃金奴隷である。

③ 機械制大工業による資本の蓄積は、所有と労働との分離を不断に生産し、一方の極に、より多くの、より大きな資本を、他方の極に、より大量の賃労働者を生み出す。この同じ過程は、独立した小生産者を駆逐し、彼らの多くをプロレタリアート、半プロレタリアートに転化し、

残りの部分についても、その社会—経済生活に占める役割を縮小し、資本に対する完全な従属におとし入れる。

④ この資本の蓄積は、婦人や児童を大量に生産過程に投げいれる。同時にそれは、生産手段に投下される資本部分に対して、労働力の購入にあてられる資本部分を相対的に減少させるので、相対的な過剰労働者軍がますます大量に生み出される。

⑤ 資本主義の本質に根ざす過剰生産は、鋭い産業恐慌となって現われ、全般的な生活の不確かさを社会の常態とする。恐慌は、それはそれで、小生産者を更にいっそう零落させ、資本に対する賃労働の従属を更にいっそう深め、労働者階級の状態の相対的悪化に、ときにはまた、その絶対的悪化にもいっそう急速にみちびいていく。

⑥ こうして、一方の極での富の蓄積は、その対極では同時に、労働者階級の生活の不確かさ、貧困、労働苦、搾取、精神的磨滅、あらゆる種類の隷属、社会的悲惨の増大となる。

⑦ しかし、ブルジョア社会に固有なこれらの矛盾が増大し、発展していくにつれて、現存の秩序に対する被搾取労働大衆の不満もまた増大し、プロレタリアートの数と結束が増大し、自分たちの搾取者に対する彼らの闘争が激しくなる。それと同時に資本主義は、資本を集中、集積させ、労働を社会化することによって、資本主義を共産主義にかえる物質的可能性をますます急速につくり出していく。

⑧ 労働者階級の解放は、労働者階級自身によって闘いとられなければならない。労働者階級の経済的解放、すなわち社会革命は、資本制的私的所有——賃金奴隷制を廃止し、生産手段を社会的所有にかえ、社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障するために、社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂をなくし、「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」を実現し、こうして、人類全体を解放するであろう。

⑨ この社会革命の不可欠の条件は、プロレタリアートの階級独裁である。すなわち、プロレタ

リアートは、搾取者の反抗を鎮圧し、小ブルジョア大衆を指導するために、ブルジョア国家権力を打倒し、自己の国家権力を闘いとらねばならない。それは、必然的に暴力革命とならざるを得ない。なぜなら、ブルジョア国家権力は、ブルジョア階級独裁を維持するための道具であり、プロレタリアートは、できあいの国家機構をそのまま手にいれて利用することはできず、これを粉砕しなければならないからである。

⑩ プロレタリアートに、その偉大な歴史的任務を果たす能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争のいっさいの現われを指導し、ブルジョアジーの利益とプロレタリアートの利益とが和解しえないように対立していることを、プロレタリアートの前に暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な諸条件とを彼らに対して明らかにする。それと同時に国際共産党は、その他の勤労被搾取大衆の全体にむかつて、資本主義社会では彼らの地位は絶望的であり、彼ら自身を資本の圧制から解放するためには社会革命が必要であることを明らかにする。勤労者階級の党であるわが党は、勤労被搾取住民の全ての層を、彼らがプロレタリアートの立場に移ってくるかぎりで自分の隊列によびいれる。

## Ⅱ 帝国主義と世界プロレタリア革命

⑪ 資本の蓄積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、二〇世紀の初頭に、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本とを融合させ、外国への

資本の輸出を強化させた。資本主義列強のいくたのグループを包括するトラストは、すでに地域的に分割ずみの地球の経済的分割を開始した。これは、資本主義諸国家の間の闘争を不可避免的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。

⑫ ここからして帝国主義戦争が、すなわち、販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、弱小民族に対する支配権のための戦争が不可避免的に生じる。第一次、および第二次世界大戦こそまさにそういう戦争であった。

⑬ 世界資本主義一般が、きわめて高い発展水準に達していること、国家独占資本主義が自由競争にとつてかわったこと、銀行ならびに資本家団体によって、物資の生産と分配の過程に対する社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価騰貴と労働者階級に対するシンジケートの圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争が巨大な障害に面していること、帝国主義戦争が惨禍や災厄や零落や野蛮化を生み出していること——すべてこれらのことは、資本主義の破綻と、より高度の型の社会経済制度への移行、プロレタリア共産主義革命とをさけられないものにした。

⑭ 世界資本主義が到達したこのような発展段階にあっては、帝国主義戦争は不可避免的に、プロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆の、ブルジョアジーに対する内乱に転化した。一九一七年ロシア十月革命は、プロレタリアートの階級独裁を実現し、プロレタリアートは貧農すなわち半プロレタリアートの支持を受けて、共産主義社会の建設にすすみ始めた。世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まった。

⑮ 帝国主義が植民地民族や弱小民族を略奪することによって、ブルジョアジーに、この略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層に特権的地位をあたえ、それによって彼らを買収し、平時には相当の小市民的生活をこの上層に保障し、この層の指導者を

自分の召使い、労働代官としたという事情は、プロレタリア運動の内部に、社会主義の小ブルジョアの歪曲——日和見主義と社会排外主義の潮流を生み出した。これは、口先での社会主義、実際の排外主義であって、総じて自国ブルジョアジーの略奪者の利益の擁護を祖国擁護のスロガンでおおいかくすものである。

### Ⅲ 世界プロレタリア共産主義革命の時代と世界プロレタリア独裁

①⑥ ロシアにおいてプロレタリアート独裁が樹立され、全世界における帝国主義と搾取者に対するプロレタリアート・被搾取労働大衆の反抗がいちじるしく強まったことによってプロレタリアートの国際的結束は飛躍的に強化された。こうした中で、ロシア共産党をはじめとする革命的潮流は、社会民主主義の潮流と断乎として手をきり、それと仮借なく闘うことによって共産主義インターナショナル（国際共産党）を創設した。

①⑦ 更に、植民地・半植民地・被圧迫従属諸国において、帝国主義に対する闘争もまた大きく発展し、国際プロレタリアートの闘争と結びつくことによって、資本主義の全面的な発展を経ないでも社会主義を実現する可能性が生み出された。こうした事情は、これら諸国の民族解放運動をさらに発展させ、国際共産党と国際プロレタリアートの革命運動に緊密に結びつけ、世界プロレタリア共産主義革命の一環に転化した。これら諸国の多くに共産党が誕生し、民族革命運動を指導することによって、プロレタリアートの闘争は真に世界的なものになり、地上の大多数の住民、被抑圧民族、被搾取労働大衆をひきよせるものとなった。

①⑧ このように、プロレタリアートと被搾取労働大衆、被抑圧民族の攻撃が増大し、いくつかの

国でプロレタリアートが勝利したことは、搾取者の反抗をつよめ、搾取者の側でも帝国主義ブルジョアジーの国際的統合の新しい諸形態をつくり出し、その結束をつよめるにいたった（第一次大戦後の国際連盟、ヴェルサイユ体制、第二次大戦後の日米安保、NATO、IMF、国際連合など）。帝国主義ブルジョアジーは、プロレタリア諸国を政治的、軍事的、経済的に封じこめ、全ての国のプロレタリアート人民の革命運動を直接に鎮圧するとともに、世界的な規模で、系統的に人民を搾取することに力を注いでいる。

①⑨ 帝国主義ブルジョアジーは、また、プロレタリアートの革命的攻勢が民族解放運動を自分の陣営にひきよせて発展することを防止するため、第二次世界大戦後、多くの植民地、半植民地に形式的独立を許すことによって、民族ブルジョアジーの大きな層をふくむこれら諸国の搾取階級を、国際ブルジョアジーと国際反革命体制の一環に組み入れ、従属せしめた。

②⑩ 世界プロレタリア共産主義革命の一时的な敗北、後退の中で、ロシア共産党と第三インターの内部に現代修正主義の潮流が生み出された。

△それは、マルクス主義の経済主義的歪曲を基礎として、「一国社会主義建設可能論」にはじまり、後には、「敵対する階級の消滅、社会主義の勝利」を宣言し、「一国共産主義論」として完成された。現代修正主義がソ連共産党を制圧することによって、プロレタリアート独裁のブルジョア独裁への変質が始まった。その社会階級の基礎は、広汎に残存する商品経済と、その土台の上にそびえ立つ国家資本主義を背景に生まれた特権官僚集団である。

ソ連現代修正主義は、「全人民の国家、全国民の党」の旗をかかげてブルジョア独裁を実行し、社会主義と資本主義の永遠の平和共存の主張のもとに、帝国主義と結託して国際プロレタリアート人民の闘争を抑圧し、国際プロレタリアート人民の闘争を利用して、帝国主義と世界支配のための争奪をおこなっている。それは、口先での社会主義、実際の帝国主義、すなわち、社会帝国主義である。これに追隨して多くの諸国の公認の共産党もまた現代修正主義に転化し

た。

平和主義、議会を通じた平和革命、帝国主義と社会主義の永遠の平和共存、資本主義のもとでの軍備縮小などの主張は反動的なユートピアであるばかりか、プロレタリアート・被搾取労働大衆を露骨に欺まんするものであり、プロレタリアートを武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリアートをそらせることを目的とするものである。

②① 今日、ベトナム・インドシナを先頭とする第三世界において、民族解放と革命が力づく前進し、中国を先頭とするプロレタリア諸国においても、プロレタリア階級独裁はますますうち固められている。そして相対的安定期が終えんし激動の時代に突入した帝国主義諸国において、プロレタリアートの反抗が増大している。

他方、革命と民族解放の前進に後退を余儀なくされてきた帝国主義諸列強は、相互に対立を激化させ、国際反革命体制を動揺させながらも反攻をつよめつつある。

こうした中で、ソ連社会帝国主義は、帝国主義と結託して中国を封じこめ、革命と民族解放を抑えこむことにますます力を注ぎ、同時に、帝国主義との世界支配のための争奪を激化させている。しかし、社会帝国主義の策動も、中国を先頭とする全世界のプロレタリアート・人民・被抑圧民族の反撃に直面して思うにまかせないでいる。

こうしたことから、帝国主義世界大戦の危機もまた、依然として存在するが、しかし、世界の主な傾向は革命であると言える。

②② すべてこうしたことのため、個々の国の内乱と、自己を防衛するプロレタリア諸国、および被抑圧諸国民の、帝国主義、社会帝国主義に対する革命闘争、革命戦争が結びつくことはさけられない。

②③ 帝国主義がつくり出す袋小路から人類を脱出させることができるのは、世界プロレタリア共産主義革命だけである。世界プロレタリア共産主義革命の前進と究極の勝利のためには、社会

民主主義のみならず、現代修正主義、ソ連社会帝国主義と断乎として手を切り、仮借なく闘うことが不可欠であり、国際共産党を再建することが急務となっている。世界プロレタリア共産主義革命の究極の勝利のために不可欠の条件は、世界プロレタリア独裁である。国際共産党の当面する政治的任務は、世界プロレタリア独裁を闘いすることである。

革命の困難がどんなであらうと、革命が一時失敗することがあろうと、また、反革命の波がどんなであらうと、プロレタリアートの最後の勝利はさけられない。

#### Ⅳ 日本プロレタリアートの当面する政治的任務

世界プロレタリア共産主義革命の時代にあつて、国際プロレタリアートの共通の終局目標への途上で、さまざまな国の共産主義者がかかげる当面の任務は、その発展段階がどこでも同一ではないため、また、それぞれの国が異なる社会的・政治的環境の中にあるため、それぞれ異つたものとならざるをえない。

日本では現在、金融資本の全面的支配が確立されており、資本主義の最高の発展段階たる帝国主義の段階にある。

現在、日本の国家権力は、金融資本と網の目のように密接に結びつき、ゆ着し、プロレタリアートの自らの解放をめざすいっさいの志向を、組織的に、強圧的におしつぶしているブルジョア独裁権力である。

この国家は「世界の憲兵」たる米軍を駐留させていることにもっともよく示されているように、わが国のプロレタリアート・人民に対する階級支配を米軍の力によって補完し、アメリカ帝国主



義に著しく依存し、同時に、アメリカ帝国主義を盟主とする国際反革命体制の一環を、現にプロレタリアートにとってかわられつつあるブルジョアジーの国際的な階級的利益から担っている。今日、わが国では、ブルジョア民主主義制度が、一握りの人々による専制支配を、プロレタリアート。人民の目からおおいかくす上で大きな役割を果たしている。

ゆえに党は、ブルジョア独裁権力を打倒し、わが国におけるアメリカ帝国主義の反革命支配を一掃し、次のことを保障するプロレタリアート独裁を樹立することを当面の任務とする。

#### (一) 一般的政治的分野で

一、ブルジョア国家機構を解体し、武装した労働者、勤労大衆の大衆組織に立脚し、立法権と執行権をあわせもつ国家機構を樹立する。

二、すべての官吏は、プロレタリアート、被搾取勤労大衆によって選出および罷免でき、その賃金は、労働者賃金の平均におさえられること。

三、自衛隊および在日米軍の解体。労働者、勤労大衆によって構成される赤軍の建設。労働者、勤労大衆の武装。

四、プロレタリアート、半プロレタリアートの中から、彼らの投票によって裁判官をえらぶこと。報復的に自由をはく奪するための刑罰を課すのではなく、教育、労働を通じて改造をはかることを基本とする刑罰へ転化させること。

五、国家機構をプロレタリアート、半プロレタリアートの手で直接運営するための諸策の実施。

六、労働者、勤労大衆に国家行政の技術の実地訓練、および軍事訓練、兵術の習得を保障すること。

七、ブルジョアジー、搾取者の反抗の鎮圧。

八、米軍の日本駐留に代表されているアメリカ帝国主義の対日反革命支配、日本を基地とした米

帝のアジアにおける侵略、反革命、更に、アメリカ帝国主義とわが国の帝国主義的連携のいっさいを完全に一掃すること。日米「安全保障」条約とそれに付随する全ての諸協定の破棄。アメリカ帝国主義の対日資産の没収。

九、すべてのプロレタリアート独裁国家を承認し、密接な連携をとること。

十、プロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆の民主主義的権利、自由を、形式的に認めるだけでなく、物質的に保障すること。

十一、性、「身分」、民族、人種、宗教の別にかかわらず、全人民の完全な同権を実現すること。性、「身分」、民族、人種、宗教の別を理由とした差別をとりのぞき、完全な同権を実現するための物質的措置をこうずること。また、これらの別を理由に、搾取階級によって植えつけられ、広汎に伝播している差別観念、偏見を一掃するために、精神的な、ねばりつよい宣伝、教育活動を実施し、これらの差別からの解放をめざす闘争を發展させること。

十二、婦人の形式的な、法制的な同権を達成するにとどまらず、家事・育児の負担から婦人を解放するための諸策（公共の託児所、保育所、公共食堂、公共の洗たく所など）を実施すること。党は更に、婦人を社会的・イデオロギイ的転から解放することを共産主義建設の根本任務としておし進める。

十三、宗教と国家及び学校とのあらゆる結びつきを完全に打ちきること。党は搾取階級と宗教団体との結びつきを断ちきり、勤労大衆を宗教的偏見から現実解放するのを助けるために努力し、強圧的方法や信仰を持つ者の感情を侮辱するような方法ではなく、最も広汎な科学的・啓蒙的宣伝と反宗教的宣伝とを組織する。宗教的偏見は、大衆の社会・経済的活動の全般にわたって計画性と意識性を実現するとき、はじめて死滅するであろう。

十四、天皇制の廃止。

## (二) 対外および民族関係の分野で

- 一、ブルジョアジーと地主を打倒するための共同の革命闘争のために、さまざまな民族のプロレタリアおよび半プロレタリアの相互接近をはかること。
- 二、帝国主義、抑圧民族と闘っているすべての国、民族、人民を物質的およびその他の方法で援助すること。
- 三、植民地、非同権民族に対する民族自決権の承認。諸民族、諸国家の完全な同権を実現すること。
- 四、わが国の、他国、他民族にたいする侵略、干渉の完全な廃止。日「韓」条約など、いっさいの帝国主義的諸条約、取り決めの破棄。日本帝国主義の対外資産の放棄。
- 五、国内におけるあらゆる民族の抑圧、差別を一掃するために、在日被抑圧民族を中心とし、労働者組織を多数参加させることによって構成される機関による諸策、教育活動を実施し、国家がそれを物質的に保障すること。

いずれにしても、抑圧民族であった民族のプロレタリアートは、被抑圧民族または非同権民族の労働大衆のもつ民族感情にたいして特別に慎重な態度をとり、特別の注意を払うことが必要である。このような政策をとる場合にだけ、国際プロレタリアートの民族的にあり異なる民族的諸要素が、真に恒久的な、自主的な統一をおこなうための諸条件をつくり出すことができる。

## (三) 経済の分野で

- 一、ブルジョアジーの収奪。生産手段をプロレタリアート独裁国家の所有にかえること。
- 二、プロレタリアート独裁国家による銀行の所有を実現し、銀行をプロレタリアート独裁国家の統一的な記帳と全般的会計の機構に転化すること。
- 三、土地の私的所有を廃止し、プロレタリアート・労働大衆の共同所有にかえること。

四、プロレタリアート独裁国家のもとで、単一の全国家的計画にしたがって国の経済的活動を最大限に統合し、生産機構を整備し、国の物質的資源を合理的に利用し、その節約をはかること。

五、プロレタリアート独裁国家のもとで、それぞれの生産部門の労働者の多数を組織した団体、たとえば労働組合の、すべての工業管理機関への参加を実現すること。このことを通じて、経済の運営の直接の仕事に労働大衆をきわめて広範に参加させること。

六、プロレタリアート独裁国家のもとで、すべての国民にたいし、生産的労働に従事する義務を課すこと。労働者組織との協力によって、労働力を国民経済のさまざまな必要部門の間に正しく配分し、また、再配分すること。不生産的な寄生的部門から労働者を生産的部門に移すこと。

七、プロレタリアート独裁国家のもとで、社会主義的大農場共同耕作のための団体の組織化をはかり、これを国家が特別に優遇し、育てること。

八、共産主義建設の根本任務のひとつである都市と農村の対立を止揚するために、プロレタリアート独裁国家のもとで農村における生産活動、消費生活を集団化し、農業を機械化し、農業と工業を結合し農村における共産主義建設に工業労働者を広範に計画的にひき入れること。

九、プロレタリアート独裁国家のもとで、商業を計画的な全国家的な規模で組織された生産物分配にかえること。

十、有産者に対する高度の累進課税を実施すること。プロレタリアート、半プロレタリアートからの直接税の徴収をやめること。いっさいの間接税の廃止。

十一、労働組合が作成した賃金率にもとづいた賃金を保障すること。

十二、資本家の家主の所有するいっさいの家屋を没収し、労働大衆に解放し、それらの建物の維持費を国家が負担すること。資本家、大地主以外の家屋所有者の利益を尊重し、労働大衆の住宅事情、生活環境を改善し、労働者、労働大衆の生活条件にふさわしい家屋を大量に建設し、合理的な分散居住を実現すること。

党は一貫して労働者階級に依拠するものであるが、小ブルジョアジーにたいしては、徐々に、計画的に社会主義建設の活動にひきこまれる。党は、小ブルジョアジーを、ブルジョアジー及び富農からきりはなすこと、小ブルジョアジーの必要に対し注意深い態度をとって、彼らを労働者の味方にひきこめることを自己の任務とするが、その際、彼らの後進性にたいしては、けつして弾圧の方策をとらずに思想的なはたらきかけの方策によって闘い、彼らの切実な利益にふれるあらゆる場合に、彼らとの実務的な協定をとげるようにつとめる。

#### (四) 労働保護と社会保障の分野で

- 一、労働者階級を肉体的および精神的磨滅から防衛し、彼らの解放闘争の能力を発展させるために党は一貫して闘う。
- 二、すべての国民に働く権利を完全に保障すること。
- 三、すべての労働者に対して、一日の労働時間を最高六時間とすることを実現し、時間外労働を完全に禁止し、更に、可能なかぎりでの労働時間の短縮を実現すること。
- 四、すべての勤労者にたいして、毎週連続六四時間以上の休息をあたえること。すべての勤労者にたいして少なくとも一ヶ月の年次有給休暇が与えられること。
- 五、国民経済のすべての部門で、夜間作業（夜九時から朝六時まで）を禁止すること。ただし、労働者団体の承認した技術上の理由で夜間作業を絶対に必要とする部門はこのかぎりでない。
- 六、十八才未満の者、とくに有害な産業に従事する者、ならびに鉱山ではたらく鉱山労働者については、当面労働日は六時間をこえることはできない。将来、これら重労働、有害労働、危険労働に従事する労働者の労働時間を更に短縮し、十八才未満の者については、教育と結合して実施される社会的——生産的労働を除いて作業を完全に廃止すること。

七、十六才未満の児童の労働を雇用することの完全な禁止。

八、婦人労働者にたいするあらゆる差別を一掃する。婦人は産前二ヶ月、産後六ヶ月は就業を免除され、その全期間ひきつづき賃金の全額をうけとる。また、婦人労働者は、乳児に哺乳するため、三時間ごとに毎回三〇分以上の休けいをゆるされ、哺乳期間の母親には、追加の手当があたえられる。出産費用を国家と雇い主が全額負担すること。

九、労働者組織によって労働監督機関と衛生監督機関をもうけること。

十、他人の労働を搾取しないすべての勤労者が、いかなる形にせよ、労働能力を喪失したり、また、失業した場合にたいし、雇い主と国家が負担し、被保険者が完全に自主的に管理し、労働組合を広範に参加させた全面的な社会保障を実施すること。

十一、雇傭や解雇をはじめとしたあらゆる労働問題の決定に、労働者組織に参加させること。

十二、勤労者、労働能力を喪失した人々、未成年者にたいするすべての医療行為を国家および雇い主の負担で無料とすること。疾病を予防することを目的とする広範な保健、体育衛生措置の実行。

十三、労働保護をあらゆる種類の労働者（建築労働者、陸上運輸と水運、家事使用人、農業労働者、婦人労働者）におよばすこと。

#### (五) 教育の分野で

一、十八才未満のすべての児童にたいする無料の義務的な普通教育と総合技術教育を実施すること。

二、託児所、幼稚園、保育所などのような就学前児童のための施設網をつくること。

三、自民族の言語を学ぶ権利、自民族の言語で教育をうける権利を実際に保障すること。

四、男女共学制で、無条件に非宗教的な教育を実現すること。

- 五、授業と社会的生産的労働とを緊密に結合し、プロレタリア的、共産主義的教育を実施すること。
- 六、教育活動にプロレタリアート、労働大衆を積極的に参加させること。労働者の学習活動を物質的に保障すること。
- 七、プロレタリア的な芸術、文化活動を発展させること。

#### (六) 部落解放の分野で

一、部落差別は、封建社会において、支配階級が身分制度と自らの階級支配を維持、強化するために、政治的・権力的につくり出した「身分外の身分」——「えた・非人」制度に起源があること。

封建支配階級にとってかわった天皇制権力は、部落差別を温存、助長、拡大し、プロレタリアート人民の分断支配に利用したこと。部落大衆は、被差別身分に緊縛、拘束され、職業、結婚、居住、教育などあらゆる「社会生活」から排除され、窮乏とあらゆる社会的悲惨を集中される半ば社会外の社会におしつけられたこと。第二次大戦後のブルジョア民主主義制度のもとでも、部落差別は一層拡大強化されていること。

従って部落差別は、ブルジョア階級支配にその最も深い基礎をおりており、単なる封建遺制ではないこと。部落差別の強力なテコとなつてゐる差別観念は、典型的なブルジョア・イデオロギーであること。

それゆえ、部落完全解放の不可欠の条件は、ブルジョア階級支配の打倒とプロレタリアート独裁の樹立である。

と同時に、プロレタリアート独裁樹立のためには、この闘争の発展をおしとどめ、ほりぐす部落差別との闘いが不可欠である。

二、部落大衆の糾弾権を承認し、物質的にも保障すること。

三、部落大衆の自主解放組織を中心とし、広範な労働者組織を参加させた組織による部落解放を促進する諸策を実施し、それを国家が保障すること。

四、労働者、労働大衆の中に広汎に存在する差別観念と意識的にねばりよく闘い、そのための教育活動を推進すること。

\*

\*

\*

\*

\*

以上の政治的・社会的諸任務の達成をめざすにあたって、党は、日本の現存の社会制度および政治制度に反対する一切の民主主義運動と革命運動を支持するとともに、プロレタリアート、被搾取労働大衆にたいする官吏、警察の後見を少しでも拡大するか、あるいは、うち固める結果となるようないっさいの改良主義的計画を断乎として拒否する。更に党は、議會をはじめとしたブルジョア民主主義諸制度に対し、プロレタリアートの階級闘争の発展にとって有効である限りに於てこれを利用する。その場合党は、ブルジョア民主主義制度が、ブルジョア階級独裁をおおいかくすための道具であることを一瞬たりとも忘れず、これをプロレタリアート人民の前に暴露する。

党は、以上の政治的・社会的諸任務の完全な首尾一貫した遂行は、わが国のブルジョア独裁権力を打倒し、アメリカ帝国主義の対日侵略反革命支配を一掃し、プロレタリアート独裁を樹立することによってのみなせしとげることができると固く確信する。

## 綱領論争の総括提案

### はじめに

全国の共産主義者へ団結を呼びかける——マルクス主義の綱領に基づいた中央集権的非法法を建設しよう！

全国の先進的労働者、共産主義者のみなさん。

我々は、ここに綱領を明らかにする。日本の共産主義者をおおっている分散と混乱、情勢への立ち遅れ、経済主義やテロリズムなど様々な色合いの手工業性を克服する必要がある。確かにその為の努力も存在しないわけではない。だが、これらの努力も、最も確固とした、継承性のある革命組織をつくり出すことに残念ながら、成功しているとは言えない。このような分散、混乱、偏向を克服することができるのは、原則的な思想的統合を基礎とした時のみである。この思想的統合は、綱領として打ち固められなければならない。綱領に対する日本の共産主義者と先進的プロレタリアートの需要が本当に緊切なものであるということは、全く疑いの余地がない。このことを否定したり一笑に付したりする人は、自分がどれだけ革命の情勢に立ち遅れているか、どれだけ革命のことを真剣に考えたことがないか、自ら暴露するものである。

ベトナム革命戦争や、中国プロレタリア文化大革命、批判批判運動や、第三世界の解放闘争の巨大な前進が、「天下大動乱」の時代が我々の目の前で展開されている。世界プロレタリア共産主

義革命の前進、帝国主義とソ連社会帝国主義の結託と争奪の激化、体制的危機の深化、プロレタリアートの反抗の増大、これら全てが、日本の共産主義者の立遅れと混乱とをきわだたせ、激しく鞭打っているではないか。社会の選挙亡者たちは、〇〇連合政府だといって、プロレタリアートを体制内の改良に駆りたてているではないか？ブルジョア独裁を打倒し、プロレタリアート独裁を打ち立てるために、プロレタリアートの階級闘争の一切の現れを指導し、彼等を革命的な階級党に組織することが、まさにこのことが、決定的に立ち遅れているのではないのか？今までの「新左翼運動」のように、明確な綱領をもたず、階級闘争の現闘の部分的現われに拝跪し、手工業的な活動に固執している限り、日本の革命の未来はない。

「現在では、我々の運動の緊要な問題は、以前のばらばらな『手工業的』な活動を発展させることではではなく、団結させること、組織化することである。綱領は、このような一歩を踏み出すために必要である。綱領は、我々の基本的な見解を定式化し、我々の当面の政治的任務を正確に定め、扇動活動の範囲を標示すべき当面の諸要求を示し、扇動活動に統一性を与え、扇動活動を広め、又深め、扇動を小さな、ばらばらな要求のための部分的、断片的な扇動から、社会民主主義的な（共産主義的な）筆者）諸要求の総体のための扇動へ高めなければならない。今や、社会民

主義的活動が、すでにインテリゲンツィア社会主義者と自覚した労働者の双方の、かなり広範な範囲をふり立させている時には、綱領によって、彼等のあいだの結合を固め、そうすることによって、彼らの全てに、今後のいっそう広範な活動のための緊固な土台を与えることが、緊急の必要である」（わが党の「綱領草案」問題別レーニン選集一「党綱領問題（I）四一頁」）

我々は、この綱領をこのような意味で、日本の共産主義者の全てに提出し、論戦を呼びかけるものである。論戦のなかには、綱領問題もちこむこと、これは、日本の革命運動の隊列の中での様々な論争や対立をいっそう高い次元に引き上げることになる。論戦が無益なものにとどまったり、個人的な言い合いに堕したり、見解の混乱に導いたり、敵味方の混乱に導いたりしないようにするためには、この論戦のうちに綱領の問題をもち込むことが無条件に必要である。論戦が意見の相違は本来どこにあるのか、それは、どれだけ深いものなのか、そのことの性質に触れた意見の相違なのか、そうでないかを、解明するとき、その時に、初めて論戦は利益をもたらすであろう。綱領問題を論戦のうちにもち込むことだけが論戦の両当事者が自分の綱領的な見解を明確に説明することだけが、緊急に解答を必要としているこれらの問題の全てに解答を与えることができる。（同書四二頁）

我々は、日本の共産主義者が団結することを心から望んでいる。だが、それは、原則を踏みはずしたり、原則を妥協させたりすることによってではなく、真のマルクス主義の原則的に立脚した思想的統合を基礎としてのみ可能である。このような基礎の上に打ち立てられていない「党」は、それが、みかけの上で、どれだけ強大に見えようと、全くもろいものである。六〇年代以降の「新左翼運動」が、身をもって経験してきた苦い教訓である。だから、我々は、原則を譲り渡すつもりは全くない。だが、原則において、一致できるならば、それこそ、小異を残して大同につ

かねばならない。いやしくも、革命性を捨て、小さなサークルやグループの利益にしがみつくのではなく、又、過去のいきがかりを捨てて、団結しなければならない。（勿論、原則的党派性を捨てるというだけでは全くない。）そして、もし我々が、このよう原則的統合を実現することができれば（否、実現しなければならぬ。）我々は、プロレタリアートと革命に対する責任を立派に果たすことができるであろう。我々の前面には敵の要塞が、その全威力を擁して立ちふさがっており、そこからは、我々の上に雨あられと砲弾や銃丸が飛びかけられ、我が最良の闘士たちを奪い去っている。我々は、この要塞を奪取しなければならぬ。そして、もし、我々が、目覚めつつあるプロレタリアートの全勢力と日本の革命家の全勢力とを統合して、日本における生命ある者、誠実なもの全てを引き寄せる単一の党とするなら、我々は、この要塞を奪取するであろう。「幾百万の働く人民の筋骨たくましい腕は振り上げられ、兵士の銃剣に守られた帝国主義のくびきは、木っ葉みじんに打ち砕かれるであろう。」

### 綱領の形成と骨格について

綱領は、理論的部分（I—III）と実践的部分（IV）とに分かれる。綱領の全体の形式は、一九一九年ロシア共産党（ボルシェヴィキ）綱領の形式を継承している。又、綱領の全体にわたって、この一九一九年綱領の確信が継承されている。綱領は、厳格に、マルクス主義の原則を継承したものでなければならぬ。一九九年綱領の原則的見地が現代修正主義や反スタ・マルクス主義によって投げ捨てられている現在、この見地は、まさに党の旗印として高々と掲げられねばならない。

一九九年綱領の原則的部分は、一九〇三年のロシア社会民主党綱領の理論的部分がそのまま継承され、新たに帝国主義の特徴づけと世界プロレタリア共産主義革命の始まりについての規定が加えられ



ている。一九〇三年の綱領は、レーニンとブヘーノフの論争を軸にして、最終的にはマルトフが中心になって作成された案が採用されている。この案は、必ずしもレーニンの主張を全面的に取り入れたものではなく、不十分な点も多いが、我々は、論争にあつたレーニンの意見を考慮し、数ヶ所をそれを採用している。

⑦労働過程の社会化、労働の社会化、⑧搾取者の利益と被搾取者の利益、ブルジョアジーの利益とプロレタリアートの利益等）

レーニンは、彼の草案を見ても、多くの点でエルフルト綱領に依拠している。（「我が党の綱領草案」では、「労働者解放」団の草案をエルフルト綱領に近づけるような変更を加えるように提案している。）

だが、一九〇三年綱領は、エルフルト綱領が、完全に沈黙している社会革命の不可欠の条件たるプロレタリアート独裁を宣言し、このプロレタリアートの社会革命の障害物としてのツァーリ専制の打倒によってプロレタリアートの階級闘争の発展を勝ち取ることに、当面の要求として掲げられ、エルフルト綱領がプロレタリアート独裁について沈黙するだけでなしに、帝制の打倒、民主共和制樹立についても沈黙していたのに対し、プロレタリアートの階級闘争の原則的見地が実際に貫かれていた。そしてこれらの見地は、マルクス第一インター規約、ゴータ綱領批判の見地の継承であり、エンゲルスのエルフルト綱領批判の見地の継承に他ならない。

エルフルト綱領は、単にプロレタリアート独裁の樹立と専制の打倒について沈黙しただけではなく、もっと根本的な欠陥をもっていた。「労働者階級は政治的権利をもたないでは、その経済闘争をおこなない、その経済的組織を發展させることができない」というふうに、経済闘争の道具として政治（闘争）を規定している経済主義の見地である。これは、資本主義とプロレタリアートの階級闘争について、単に搾取と被搾取というふうにししか扱えてい

ない資本主義批判から発しているものであり、後にこの経済主義の見地は、日和見主義、社会排外主義に転化するものである。このような資本主義批判の見地は経済主義は、後に見るように、スターリン主義によって継承されており、ローザやトロツキーも又、基本的に、この枠内での左翼反対派の域を出ていない。一九〇三年、及び一九一九年綱領は、この点については、明確な一線を画しておらず、原則的部分における限界として残している。第二インター・カウンスキーのプロレタリアート独裁の放棄は、この資本主義批判の誤り、プロレタリアートの階級闘争の原則に対する誤りが根底にあり、そこから経済主義的政治が、プロレタリアート独裁の放棄が帰結しているものであり、スターリン、トロツキー、ローザ・ルクセンブルグも又、決して、これを越えてはいないのである。だが、我々は、綱領の原則的な部分に対するマルクス主義の原則的見地を復権することを、最も核心問題として取り上げたのである。

綱領の実践的部分において、一九年綱領の実践的部分をそっくりそのまま書き写して、「一国プロレタリアート独裁の政策綱領」なる議会主義まがいの選挙公約に変えてしまった部分があるが、これは全く誤りである。なぜなら、一九年綱領は、既に樹立されたプロレタリアート独裁ソヴィエト権力を基礎にして、党の具体的任務を提出しているものであり、これから、プロレタリアート独裁を樹立しなければならぬ我々の綱領にそのまま採用することはできないのである。我々は、その核心を継承し、より簡潔に、鋭く示し、まさに日本プロレタリアートの進むべき進路を指し示さなければならぬのである。

## I ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命

①最初に、プロレタリアートの運動の国際的性格を明示し、世界プロレタリア共産主義革命の時代という現代の根本的、歴史的

性格を示し、我が党が、プロレタリアートの世界軍の一部隊であると指摘している。一九〇三年綱領では、「交換の発展は、文明世界の全ての国民の間に、きわめて緊密な結びつきを打ち立てたので」……「国際的運動にならざるをえなかった。」となつてゐる。

しかし、プロレタリアートの運動の国際的性格は、単に「交換の発展」によってだけ、もたらされたのではない。何よりも、資本制的生産様式の下でのプロレタリアートの経済的地位が、どの国でも同一であることによって、根本的に規定されており、そして、世界交通や世界市場によって結びつけられているのである。エルフルト綱領では、「労働者階級の利害は、資本主義的生産様式のおこなわれている全ての国々で等しい。世界交通と世界市場のための生産とが拡大するにつれて、各国の労働者の状態は、ますます他の国々の労働者の状態に依存するようになる。だから、労働者階級の解放は、全ての文化国の労働者が一様に参加する事業である。この認識に立って、ドイツ社会民主党は、自身を、その他の全ての国々の階級意識ある労働者と一体であると感じ、又宣言する。」と述べられているが、綱領では、この趣旨が生かされていない。

## ②⑦について

最初に、「この終局目標は、現代のブルジョア社会の性格と、その発展行程とによって規定されている。」と、綱領の原則的部分の性格が規定されている。

レーニンは、「国家と革命」のなかで、次のように述べている。「マルクスの全理論は、発展の理論——もつとも首尾一貫した、完全な考えぬかれた、内容豊富な形の一——を近代資本主義に適用したものである。その際、この理論を、資本主義の来たるべき崩壊にも、将来の、将来の共産主義の将来の発展にも適用する問題が、マルクスにおこってきたのは当然である。

では、将来の共産主義の将来の発展の問題は、どんな根拠にも

とつて、提起することができるか？

共産主義は、資本主義からの発生するものであり、歴史的に資本主義から発展するものであり、資本主義によって生み出された社会的勢力の作用の結果である、という事実がその根拠である。」（一九頁—二〇頁）

レーニンは、このあと、マルクスのプロレタリアート独裁についての規定を述べ「マルクスのこの結論は、近代資本主義社会において、プロレタリアートが演じる役割の分析と、この社会の発展についての資料、プロレタリアートとブルジョアジーの対立する利害の非和解性についての資料にもとづいている。」（二三頁）と指摘している。

ここには、綱領の原則的部分を貫く核心が表明されている。これが我々の継承しなければならない原則的見地である。

②では続いて、現代のブルジョア社会の性格について、即ち、労働者階級の経済的隷属について指摘している。ボルシェヴィキ綱領では「この生産関係のもとでは、商品の生産、及び流通の手段の、もつとも重要な、著しい部分が、少数の人間からなる階級に属しているのに、他方住民の圧倒的多数は、プロレタリアートと、半プロレタリアートからなっており、彼等は、その経済状態にせまられ、常時、あるいは、定期的に、自分の労働力を販売すること、を、よぎなくされている。すなわち、資本家の雇い人となつて、自分の労働で、社会の上層階級の所有をつくり出すことをよぎなくされている。」と述べられているが、労働力の不断の売買が仮象であり、賃労働の資本への隷属の形式としてのみ現われ、又、この本質的事実をおおいかくすものとして現われるといふことが、根本的に重要なものであり、綱領は、この点について鋭く指摘している。

まず、第一に、指摘しておかなければならないのは、資本家と労働者の関係を、平等の商品関係だと捉えるブルジョア的見地（特

に、宇野・黒田などの反スタ・マルクス主義の誤りである。資本主義的生産過程の事実に与えられた基礎であり、出発点であるのは、労働生産物と労働そのものの分離、客体的な労働条件と主体的な労働力との分離である。だが、ここからは、未だ、一方には生産手段と生活手段との所有者、他方には、ただ労働力だけの所有者が、互いに「買い手と売り手」として相対しているだけであり、この売買は、平等の商品交換を未だ否定しはしない。だが、直接的生産過程において、諸商品の死んだ対象性、対象化された死んだ労働が、生きた労働を合体し、吸収することによって価値を増殖する。すなわち、自己増殖する価値「資本」となる。

(剰余価値の搾取) 資本主義的生産過程は、ここでは、まず、労働過程と価値増殖過程の統一として烙印される。資本主義的生産過程の単なる反復、再生産過程は、労働力と労働条件との分離を再生産し、労働者の搾取条件を再生産し、永久化する。「資本家と労働者」とを商品市場で、買い手と売り手として向い合わせるものは、もはや偶然ではない。一方の人を、絶えず他人の人の販売手段に転化させるものは、過程そのものの必然の成り行きである。実際、労働者は、彼が資本家に売る前に、すでに資本に属しているのである。彼の経済的隷属は、彼の自己販売の周期更新や、彼の個々の雇い主の入れ替わりや、労働の市場価格の変動によって媒介されていると同時に、おおい隠されているのである。」(資本論六〇三頁、註ページ数は原本第一巻のページ数を示す) こうして資本主義的生産過程は、商品だけでなく、剰余価値だけでなく、資本関係そのものを、一方に資本家を、他方に賃労働者を生産し、再生産する。(労働者は、賃労働者として、不断に再生産され、永久化される。又、社会的立場から見れば、労働者階級は、資本の再生産の恒常的条件として、不断に維持され、再生産され、かくて直接的労働過程の外でも、資本の付属物となる。賃労働者は、見えない糸によってつながれる。) 更に、拡大された規模での資

本主義的生産過程(資本の蓄積)は、商品生産の所有法則を、資本主義的取得様式に変転する。「最初、所有権は、自分の労働に基づくものとして、我々の前に現われた。少くとも、このような仮定が認められなければならなかった。なぜならば、ただ同様の商品所有者が、相対するだけであり、他人の商品を取得するための手段は、ただ自分の商品を手放すことだけであり、そして自分の商品は、ただ労働によってつくり出されるだけだからである。所有は、今では、資本家の側では、他人の不払い労働、又は、その生産物を取得することの不可能として現われる。所有と労働との分離は、外観上、両者の同一性から出発した一法則の必然的な帰結になるのである。」(資本論六一〇頁) こうして又、「最初の売買として現われた等価性どうしの交換は、一変して、ただ外観的に交換が行われるだけになる。なぜならば、第一に、労働力と交換される資本部分そのものが、等価なもので、取得された他人の労働生産物の一部分にほかならないからであり、第二には、この資本部分は、その生産者である労働者によって、ただ補填されるだけではなく、新しい剰余を伴って、補填されなければならないからである。こうして、資本家と労働者とのあいだの交換という関係は、ただ流通過程に属する外観でしかなくなり、内容そのものとは無関係で、ただ内容を不可解にするだけの単なる形式になるのである。労働力の不断の売買は形式である。内容は、資本家が、絶えず等価なしで取得する、すでに対象化されている他人労働の一部分を、絶えず繰り返し、それよりも多量の生きている他人労働と取り替えるということである。」(同六〇九頁) 又、全体としての各社会階級の間を関係は売買のうちに求めることは許されない。だから、資本制生産は、「交換なくして、しかも交換の仮営のもとで、個人の労働を領有することに立脚する生産」(資本制生産に先行する諸形態「六七頁」ということができるであろう)。

ところが、宇野の場合には、「資本—労働者との間の交換過程は……社会的には結局、生活資料と労働力との交換過程」「労働者が自らの労働によって生産したものを商品として買い戻すという関係」というふうにとらえ、このようにして、資本家と労働者との関係を平等の商品交換関係だとみなすわけである。そしてこのようにして「生産過程そのものを商品形態でもって行うこと」「商品が、商品を生産する自立的な商品経済」として資本制生産をとらえている。こういう見解がいかに誤ったブルジョア的見地であるかは、今見た通りである。「資本主義的生産過程の不断の結果としての労働能力の売買は」「労働者の、すなわち、自分にたいして独立化された対象的労働の維持および増殖の単なる手段としての生きている労働の、資本のもとへの隷属を媒介する形態としての「現われる」のであり「労働の買い手としての資本と労働の売り手としての労働者との関係の永久化」(「直接的生産過程の諸結果」一四六—一四七頁)なのである。宇野は「資本関係の外観のなかに本質をみいだし」資本家と労働者との商品所有者どおしの平等な商品交換とみなすことによって、この関係「対象化された労働の生きた労働に対する支配、資本の賃労働に対する支配」を弁護し、その種差を消し去ってしまったのである。

この宇野の誤りは、資本発生条件としての「労働対象と労働者との分離」即ち二重に自由な労働者の産出を労働者の商品化という面からのみ一面的にとらえ、更に、この労働力の商品化を資本の現在の現実化の条件としてとらえる誤りを犯すことによって不可避となった。資本制生産は、資本家階級による生産手段の独占と二重に自由な労働者の産出を歴史的、事実上の前提とする。(資本の本源の蓄積)だが、資本制生産過程は、この分野そのものを不断に生産し、かくて前提は結果となる。(貨幣の資本への転化が、労働の客観的諸条件を分離し、労働者に対して自立化させた歴史的過程を前提とすれば—他方では、全ての生産をみずか

らに従属させ、またいたるところで、労働と所有との間の分離、労働と労働の客観的諸条件との間の分離を進展させ貫徹するのは、ひとたび成立した資本とその過程との作用である。」(先行する諸形態七一頁)「資本の発生にとっては、与えられた外的な前提として現われるとも、資本が資本として生成するやいなや、資本はそれ自身の前提を、すなわち交換なしに新しい価値を創造するに必要な現実的諸条件の占有を—それ自身の生産過程を通じて—つくりだす。もともと資本の発生の条件として現われた—それだからまた資本としての、その行為からは、それまでは生ずることができなかった—これらの諸前提は、いまや資本自身の現実化の結果として、現実性として、資本によって指定されたものとして—資本発生条件としてではなく、その定在の結果として—現われる。資本は、もはや前提から出発して生成するのではなく、資本自身が前提となっており、自身から出発しつつ、それは、その維持と成長の前提そのものをつくりだす。」(経済学批判要綱三九六頁) スターリン主義、現代修正主義の場合も、資本発生条件と資本の現在の現実化の条件とを混同し、資本制的生産過程を剰余価値の生産にのみ一面化し(資本関係を生産することを忘却)、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の歴史的な性格を明らかにしえないのであるが、この点については②の項を参照せよ。

我々は、資本制的生産過程、蓄積過程の分析から、労働者階級の資本家階級に対する経済的隷属を明らかにすることによって、「労働用具、すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷属が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にあること」が明らかとなり「それゆえ、労働者階級の経済的解放が本目的であって、あらゆる政治的運動は、手段としてこの目的に従属すべきものであること」(第一インター規約前文)というプロレタリアートの階級闘争と共産主義運動の原則的見地を復権することができるのである。

③④⑤⑥⑦は、②の指摘を受けて、資本制生産の発展行程がどのようにして進み、労働者階級の経済的隷属がどのように深まっていたかを、そして又、「労働者に前記の社会的災禍を打破する能力をあたえ、また打破せざるをえないようにする物質的その他の諸条件が、いかにして現存の資本主義社会のなかでついにくりだされたか」(ゴータ綱領批判)三九頁)を説明している。

③の項は、資本の蓄積過程について指摘し、資本主義の成長と小生産者の駆逐を指摘している。

「資本の蓄積は、拡大された規模での資本関係を、一方の極により多くの資本家またはより大きな資本家を、他方の極により多くの賃金労働者を再生産する。……資本の蓄積はプロレタリアートの増殖である。」(「資本論」六四一―六四二頁)

ところで、「全資本主義生産制度の中心問題は、労働日の延長または労働力の生産性の発展ないしその緊張の強化などによって、この無償労働を増大させることにある」(「ゴータ綱領批判」五二頁)が、それは、機械制大工業によって無制限となり、その時資本主義は自分の足で立つのである。

剰余価値の生産には、労働日の延長によってなされる絶対的剰余価値の生産と、必要労働時間の短縮とそれに対応する剰余労働時間の相対的延長から生じる相対的剰余価値の生産とがある。絶対的剰余価値の生産はただ労働日の長さだけを問題にする。それは、資本主義体制の一般的基础をなしており、又、相対的剰余価値の生産の出発点をなしている。相対的剰余価値の生産は、労働の技術的諸過程と社会的諸過程とを徹底的に変革する。絶対的剰余価値の生産のためには、資本のもとへの労働の単に形式的な従属だけで十分だが、相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を前提するのであって、この生産様式は、その諸方法、諸手段、諸条件そのものとともに、最初はまだ資本のもとへの労働の形式的従属を基礎として自然発生的に発生して育成される。

らの手段は彼らが労働するための諸条件をゆがめ、労働過程では彼を狭量陰険きわまる専制に服従させ、彼の生活時間を労働時間にしてしまひ、彼の妻子を資本のジャガノート車の下に投げこむ」(「資本論」六七四頁)のである。

機械制大工業による資本の蓄積の加速的發展は、農業や家内工業、マニファクチュア、小経営に破壊的な、或いは変革的な影響を及ぼし、独立の小生産者、小経営を没落させ、駆逐し、その多くをプロレタリア及び半プロレタリアに転化し、残りの部分についてもその社会経済生活に占める役割を縮少し、資本に対する従属におとしめるのである(③)。

同時に、機械制大工業による生産様式の変革は、熟練労働に代わって未熟練労働、単純労働の可能性を飛躍的に拡大し、婦人労働や児童労働を大量に生産過程に投げ入れるが、それは資本に対する賃労働の従属を更に一層深めるのである(④)。

ところで、労働の社会的生産力を増大させるための方法は、同時に資本による資本の生産の方法、資本の加速的蓄積の方法である。「ある程度の資本蓄積が独自の資本主義的生産様式の原因として現われるとすれば、後者は又反作用的に資本の加速的蓄積の原因になる。それだから、資本の蓄積につれて独自の資本主義的生産様式が発展するのであり、又独自の資本主義的生産様式の発展につれて資本の蓄積が進展する。」(「資本論」六五三頁)だから我々は、独自の資本主義的生産様式とそれから生まれる資本主義的取得様式を基礎とするものとして、又その発展として、資本主義的蓄積の一般法則を把握する。そしてそこで、資本主義の発展が労働者階級の運命に及ぼす影響をみることが出来る。

「資本主義体制の一般的基础がひとたび与えられれば、蓄積の進行中には、社会的労働の生産性の発展が蓄積の最も強力な槓杆となる点が必ず現われる。」(「資本論」六五〇頁) 不変資本部分(生産手段に投下される資本部分)に比べて可変資本部分(労働

れる。この形式的従属に代わって、資本のもとへの労働の実質的従属が現われるのである。

マルクスは、「資本論」に於て、絶対的及び相対的剰余価値について述べたあと、相対的剰余価値の生産の諸方法——協業、分業とマニファクチュア、機械と大工業——について考察している。協業と分業とを高度に発展させ、労働過程を一つの自動体系に転化した機械制大工業は、資本家への労働者の絶望的な従属を完成させる。「資本主義的生産がただ労働過程であるだけではなく、同時に資本の価値増殖過程でもある限り、どんな資本主義的生産にも労働者が労働条件を使うのではなく逆に労働条件が労働者を使うのだということは共通であるが、しかしこの転倒は機械によって初めて技術的に明瞭な現実性を受け取るのである。一つの自動装置に転化することによって、労働手段は労働過程そのもののなかでは、資本として、生きていて労働力を支配し吸い尽くす死んでいる労働として、労働者に相対するものである。生産過程の精神的な諸力が、手の労働から分離するということが、そしてこの諸力が労働にたいする資本の権力に変わるということは、すでに以前にも示したように、機械の基礎の上に築かれた大工業に於て完成される。」(「資本論」四四六頁)

相対的剰余価値の生産のための諸方法は同時にまた絶対的剰余価値の生産のための諸方法でもあり、労働日の無限度な延長こそは、大工業の最も固有な産物である。

そして「資本主義的体制のもとでは労働の社会的生産力を高くするための方法はすべて個々の労働者の犠牲において行なわれるということ、生産の発展のための手段は、すべて、生産者を支配し搾取するための手段に一変し、労働者を不具にして部分人間となし、彼を機械の付属物に引き下げ、彼の労働の苦痛で労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的な諸力を彼から疎外するということが、これ

動力に投下される資本部分)の相対的減少、即ち資本の有機構成の高度化が進行し、それは資本の集中、即ち資本家による資本家の収奪、少数のより大きな資本への多数のより小さい資本の転化を促進する。資本の集中は又逆に、資本家の有機的構成の高度化を促進すると同時に、資本の蓄積の強力なテコとなる。資本の蓄積は資本の可変成分を犠牲としての不変成分の増大を伴って行われるようになり、「一方では、蓄積の進行中に形成される追加資本は、その大きさに比べればますます少ない労働者を引き寄せるようになる。他方では、周期的に新たな構成で再生産される古い資本は、それまで使用していた労働者をますます多くはじきだすようになる。」(「資本論」六五七頁) こうして、資本の価値増殖の欲求に比べて相対的に過剰な労働者人口が、即ち相対的過剰人口が必然化される。

「しかし、過剰労働者人口が蓄積の、いかにえれば資本主義的基礎の上での富の発展の、必然的な産物だとすれば、逆にまたこの過剰人口は、資本主義的蓄積の槓杆に、じつに資本主義的生産様式の一つの存在条件になるのである。それは自由に利用されうる産業予備軍を形成するのであって、この予備は、まるで資本が自分の費用で育てあげたものであるかのよう、絶対的に資本に従属しているのである。」(「資本論」六六一頁)

④はこのような事実について指摘している。

そして、資本主義の下では不可避な恐慌は、資本主義の諸矛盾を更に激化させ、小生産者を一層零落させ、労働者の状態の悪化(相対的、或いは絶対的)に導いていく。(⑤)

既にみたように、「剰余価値の生産、すなわち利殖は、この生産様式の絶対的法則である。労働力が生産手段を資本として維持し自分自身の価値を資本として再生産し不払労働に於て追加資本の源泉を与えるかぎりでのみ、ただそのかぎりでのみ労働力は売れる」(同書六四七頁)のであった。だから「剰余価値を生産す

るための方法は全て同時に蓄積の方法であり、蓄積の拡大は全て又逆にかの諸方法の発展のための手段となる。だから資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の受け取る支払いがどうであらうと、悪化せざるをえない。」(同書六七五頁)

こうして、「相対的過剰人口をいつでも蓄積の規模およびエネルギーと均衡を保たせておく方則は……労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必然的にする。だから、一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分の生産物を資本として生産する階級の側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道德的墮落の蓄積である。」(同書六七五頁)それ故、賃労働制度は、労働者の受けとる支払いがどうであらうと、労働の社会的生産力の発展につれて増々苛酷なものになる奴隷制度である。なお⑦の労働の社会化、資本の集中、集積は、ボルシェヴィキ綱領では、それぞれ、「資本主義企業における労働過程を社会化する」、「生産および流通の手段を集積させ」となっている。前者については、ブレハーノフの第二次草案では「労働者の労働の結合」、マルトフが中心となった小委員会の草案では「仕事場の内部での労働過程を社会化し」となっている。レーニンが労働の社会化ということに狭く理解していると批判している。我々もレーニンと同じ見地から「労働の社会化」を採用した。後者については、生産及び流通手段は全て資本として現われており、しかもそれは単に集積されるだけではなくて集中されることによってより大きな意義を獲得しているということに留意してほしい。

以上の資本主義の発展行程とプロレタリアートの社会革命の条件の形成については、「資本論」第二章「いわゆる本源的蓄積」の第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」のあの有名な項で述べられている。

「自分の労働によって得た、いわば個々独立の労働個体とその

告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(七九〇—七九一頁)

なお、ボルシェヴィキ綱領は、「資本主義的生産関係を共産主義的生産関係に代える」と述べているが、我々は「資本主義を共産主義に代える」と簡潔に述べている。というのは、「自由の領域は事実上、窮迫と外的目的性によって規定される労働がなくなる」ところではじめて始まる。だからそれは、事態の本性上、本来の物質的生産の面の彼岸のものである。」(同書、第三巻)とマルクスが共産主義社会の高度の段階について述べているように、経済的の下部構造としての生産関係ということ自体が本来の意味を失っているからである。(政治的の上部構造としての国家もはや死滅している。)

⑧次に綱領は、「労働者階級の解放は、労働者階級自身によって闘いとられなければならない。」と指摘し、社会革命の終局目標について規定している。

労働者階級の解放は、他のどの階級によっても実現されることはできず、ただ労働者階級自身の事業でしかありえない。なぜなら、他の階級は全て、現存の社会経済制度——私的所有を維持する基盤に立っているからである。ブルジョアと現存の社会経済制度に對立する階級のなかで、ひとりプロレタリアートだけが革命的である。そして、プロレタリアートの解放は、ひとりプロレタリアートのみならず、他の階級と全人類の解放を意味する。なぜなら、プロレタリアートの解放は、私的所有——階級の廃止によって実現されるのであり、「階級差別の廃止とともに、これから生じるいっさいの社会的・政治的不平等はあつたから消滅する」(「綱領批判」五二頁)からである。

「労働者階級の経済的解放が目的であつて、あらゆる政治運動は手段としてこの目的に従属すべきもの」(第一インター規約趣意)であるということは②の項でも指摘されている。プロレタリアートの社会革命の終局目標は、共産主義社会の実現である。

労働諸条件との癒合にもとづく私有は、他人の労働ではあるが形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私有によって駆逐される。」

「この転化過程が古い社会を深きから見ても広がりから見ても十分に分解してしまい、労働者がプロレタリアに転化され、彼らの労働条件が資本に転化され、資本主義的生産様式が自分の足で立つようになれば、それから先の労働の社会化も、それから先の土地やその他の生産手段の社会的に利用される生産手段すなわち共同的生産手段への転化も、したがってまたそれから先の私有者の収奪も、一つの新しい形態をとるようになる。今度収奪されるのは、もはや自分で営業する労働者ではなくて、多くの労働者を搾取る資本家である。

この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸方則の作用によって、諸資本の集中によって、行なわれる。いつでも一人の資本家が多額の資本家を打ち倒す。この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて、ますます大きな規模での労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的应用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網のなかへの世界各国の組入れが進展し、したがってまた資本主義体制の国際的性格が進展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数が絶えず減ってゆくにつれて、貧困、抑圧、隷属、墮落、搾取はますます増大してゆくが、しかしまた、絶えず膨張しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗もまた増大してゆく。資本独占は、それとともに開花しそのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最期を

綱領はこのことを明確に指摘している。共産主義社会についてのスターリン主義、現代修正主義の歪曲については②で詳しく暴露・批判されている。

⑨これに次いで、綱領はプロレタリアートの社会革命の不可欠の条件としてプロレタリアートの階級独裁を規定している。それだけにとどまらず、プロレタリアートの暴力革命がプロレタリア独裁と密接不可分の結びつきであり、不可避であることを強調し、マルクス主義の国家学説を首尾一貫した形で掲出している。

国家は階級対立の非和解性の産物であり、階級支配の道具である。近代ブルジョア国家は、ブルジョアがプロレタリアートを支配するための道具である。「労働用具すなわち生活源泉の独占者への働く人の経済的隷属が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的隷属の根底にある」(「第一インター規約趣意」)こと、ブルジョア国家は、労働者階級の経済的隷属を根底にして成立していること、この点に、ブルジョア階級——ブルジョア国家がそれ以前の国家とは根本的に区別される特徴がある。ここから又、先に述べた「労働者階級の経済的解放が目的である」ということが結論づけられるのであるが、現代修正主義はこれを逆転して把える誤りを犯している。

賃労働の資本に対する隷属を根底にして成立しているブルジョア国家は、逆に又、この経済的隷属を維持するための手段に、否、一実存条件に転化する。

マルクスは、諸々のブルジョアの変革が、絶対主義の没落時代に発生した中央集権的国家機構(官僚制度と常備軍によって特徴づけられる)をうちくたくかわりに、それを完成させたこと、「近代産業の進歩が労働者階級対立を進展・拡大・激化させたのと同じ速度を以て、ますます国家権力は労働に対する資本の全国的な力、社会的隷属のために組織された公権力、階級的専制主義の機関という性質をおびてきた。」(「フランスの内乱」九一



頁)こと、階級闘争の前進にわたって国家権力の純抑圧的な性格がますますつきりとあらわれてくること、を指摘している。

「ブルジョア社会の最後の国家形態」(「ゴータ綱領批判」五七頁)である民主共和制、議會制度も又、労働力の不断の売買が労働者階級の経済的隷属を媒介するとともに、おおいにその形式であるのと同じく、ブルジョア社会のブルジョア階級に対する支配ブルジョア階級独裁をおおいかくすための形式である。「支配階級のどの成員が議會で人民を抑圧し、踏みしめるべきかを数年に一度決定すること」(「国家と革命」六八頁)、この点にブルジョア議會制度の本質がある。民主共和制は、最も強力な中央集権的国家権力をつくりだすが、それとともに、プロレタリアートの階級闘争の自由な発展のための条件をもつくりだす。(だから政治形態の問題は、どうでもよいことではなくて重要な問題であるが、だからといってブルジョア民主共和制の道を通ってでなければ社会主義を実現することができないということでは決してない。)

資本主義の下では、君主制であるが、民主共和制であるが、国家の本質はただ一つ、ブルジョア階級独裁のための道具であり、ブルジョア階級支配の機関である。

そして、一八七一年パリ・コミューンの経験は、「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま手に入れて、それを自分自身の目的のために動かすことはできない」ことを証明した。「共産党宣言」(一八七二年序文)プロレタリアートは、できあいのブルジョア国家機構を利用することはできず、それを破壊し、うち砕かなければならない。破壊し、粉碎した国家機構を何によっておきかえるか? コミュニンは、「本質的に労働者階級の政府であり、所有階級に対する生産者階級の闘争の産物であり、そのもとで労働の経済的解放を達成するための、ついに発見された政治形態」(「ランズの内乱」一〇一頁)であった。コミューンの原則——常備軍を全人民の武装にかえること、全ての公務員の完全な選挙制

と解任制、その賃金を労働者の平均賃金におさえること、議會制度の場(立法権と執行権をあわせもつ国家機構)など——は、ロシア革命や中国革命によってくり返し確かめられ、発展させられてきている。

プロレタリア革命が暴力革命とならざるをえないのは、「敵の出方」などによるのではなく、ブルジョア国家機構を粉碎し解体してプロレタリア独裁をうちたてなければならぬからである。暴力革命は、マルクス主義のプロレタリアートの階級闘争と国家学説と切っても切れないように結びついている。プロレタリアートの階級闘争を承認するものは、プロレタリア独裁を承認しなければならず、プロレタリア独裁を認めるならば、暴力革命の承認は、おしひろいなければならない。歴史的にみても、プロレタリア独裁を放棄・否定する修正主義者は、暴力革命の否定、平和革命——議會主義を唱えて現われることは、今日の「日共」の例をひくまでもなく明瞭な事実である。

⑩プロレタリアートの階級政党についての指摘は、ボルシェヴィキ綱領を継承している。そしてボルシェヴィキ綱領そのものは、第一インター規約の精神を復権させたものである。「有産階級の集権的な力にたいする闘争において、プロレタリアートは、有産階級によってつくられた全ての古い政党に対立する別個の政党に自分を組織することによってのみ、階級として行動することができ。このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに不可欠である。」(第一インター規約)この項は、一八七一年パリ・コミューンの後に、いわばそこからひきだされた教訓として付け加えられている。レーニンとボルシェヴィキはこの歴史的教訓を継承し、組織に対するマルクス主義の実践を発展させることによって、ロシア革命の勝利を導いたのである。

なお、ボルシェヴィキ綱領で「搾取者の利益と被搾取者の利益

とが和解しえないように対立し……」と述べられている箇所は、

「ブルジョア階級の利益とプロレタリアートの利益が……」と変えられている。レーニンも「小委員会の綱領草案にたいする意見」のなかで、「搾取者と被搾取者……」を批判している。「全ての労働者が、その『利益』と搾取者の利益とが『和解しえないように』対立するような状態にあるわけではない。労働農民には、大農業地主と共通するものがあるが、なにかしらがある。」(「党綱領問題」(一)一三六頁)このような観点から、レーニンの綱領草案では「七、労働者階級の解放は労働者階級自身の事業でしかありえない。こんにちの社会のその他の全ての階級は、現存の経済体制の基礎を維持する立場に立っている。」とされ、「十、ロシア社会民主党は、労働者の利益と資本家の利益とが和解しえないように対立していることを……」と述べている。そして「ブレハノフの第二次綱領草案にたいする意見」のなかでも、ブレハノフがプロレタリアートを他の労働諸階級と明確に区別していないことを手厳しく批判し、「プロレタリアートの独裁の必要をみとめることは、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級であるという『共産党宣言』の命題と、もっとも緊密に、切っても切れないように結びついているのである。」(同書一一三頁)と述べている。ここに我々はレーニンの首尾一貫した見地をみることができる。我々が継承しなければならないのは、このような見地である。

⑪に於ては、プロレタリアートと党の他の被搾取労働大衆に対する態度がこれまでの項を受けて総括的な形で提起されている。ここでは我々は、新左翼運動の社会的階級の基礎をなしてきた小ブルジョア・インテリゲンツィアについて簡単にふれておこう。「資本主義は国民労働の全ての分野で勤務者の数をとくに急速に高めており、インテリゲンツィアに対する需要をますます増大させている。このインテリゲンツィアは、その他の諸階級に伍し

て独特の地位を占めており、一部はその縁故やその他の点でブルジョア階級と結び、一部は資本主義がインテリゲンツィアからますます自立的な地位を奪い、彼らを従属的な雇人に変え、彼らの生活水準を引き下げようと脅かすにつれて、賃金労働者と結ぶ。この社会層の過渡的な、不安定な、矛盾に満ちた地位は、半世紀前にマルクスがその諷刺によってあれほどよく示さなくならなかった。あの中途半端な、折衷主義的な見解、対立した諸原理や諸見地のあな混合物、言葉の上でいって高い領域にまで高揚し、住民の歴史的諸群の衝突を空文句でぼかそうとするあの志向が、この層の間にとくに広汎にゆきわたっていることに反映している。」(レーニン「カウツキー『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』の書評」)

レーニンのこの指摘は今日ではより一層真実であるといわねばならない。我々も又そこから生まれきた新左翼運動のなかに、このような「中途半端な折衷主義の見解」や「言葉の上でいって高い領域にまで高揚」しては又すぐに意気消沈するといったような傾向を見い出すことはさして困難ではない。いや、それは、わが国の革命運動の成長の病いとして不可避であったともいえる。我々はこのような小ブルジョア性の成長の病いと闘争するなかから唯一の正しい思想としてのマルクス主義に達したのである。この小ブルジョア性の病いとの闘争が未だ過去のものとなっていないことは最近の諸事件があらに示してくれている。しかし又、二大階級対立の激化は、小ブルジョアの急進運動をよはや主役として登場させる余地をも奪っている。新左翼運動の激しい分解と混乱とはそれを示している。ここからは、プロレタリアートの階級闘争の側に移行するのか、それともブルジョアの翼に転落するのか以外ありえない。と同時に、それは新たな装いをこらして、労働運動をブルジョア階級の後尾につける経済主義との闘争がより大きな課題としてのぼっていることをも示している。

## II 帝国主義と世界プロレタリア革命

帝国主義の特徴づけに於ては、ボリシェヴィキ綱領がほぼそのままの形で継承されている。ここでは我々は、次の二つの偏向について簡単にふれておこう。

第一は、レーニンによって厳しく批判された「純一の帝国主義」なるブハーリンの見地である。資本主義を伴わない、純一の帝国主義というものは現実には存在しない。「帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。」(ロシア共産党第八回大会) 純一の帝国主義という見地をとることは、プロレタリアートの階級闘争の基礎を放棄することであり、原則的見地を否定することである。

第二は、宇野によるレーニン「帝国主義論」の改作について暴露しておかねばならない。

宇野はレーニンの「生産の集積を基礎にした集中、独占の形成」に対して、「株式会社形成と独占」という理論を、したがって「金融資本と株式資本」という見地を対置する。独占が株式会社形式を発展させ、支配するのではなく、「金融資本によって必然的に形成せられる独占」というヒルファードディング「金融資本論」の水準にひきもどすのである。したがって、独占は生産過程からの、資本制的蓄積の必然的結果としてではなく、金融資本の蓄積も各国のタイプ分析に解消され、帝国主義戦争も各国の経済政策と金融資本の蓄積タイプの偶然的なからみあいの結果として描きだされ、帝国主義戦争の不可避性と経済的基礎は否定されてしまふ。

綱領は、このような偏向・修正をほんの少しでも大目にみない、厳格な形で提出されている。「資本の集積と集中の過程は、自由競争を排除することによって、二十世紀の初頭に経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シン

ジケート・カルテル・トラストを成立させ、銀行資本と途方もなく集積された産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。資本主義列強のいくたのグループを包括するトラストは、すでに地域的に分割すみの地球の経済的分割を開始した。これは、資本主義諸国家の間の闘争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。」

そして帝国主義戦争の不可避性も明瞭に指摘されている。即ち、「資本主義列強のいくたのグループを包括するトラストは、すでに地域的に分割すみの地球の経済的分割を開始した。これは、資本主義諸国家の間の闘争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。」

又、宇野は、帝国主義が資本主義の諸矛盾を激化させ、社会革命の諸条件を成熟させるのではなく、「資本主義を不純化し、逆転させる」というふうに解釈し、社会革命についても勿論彼の視野にはない。

新左翼運動のなかには、革共同をはじめとして、このような宇野理論が広汎にゆきわたっているが、マルクス・レーニン主義の旗を掲げる共産主義者は、このような小ブルジョア的歪曲と断固として手を切らなければならない。

## III 世界プロレタリア共産主義革命の時代と世界プロレタリア独裁

この章は共産主義者同盟にあつて、過渡期世界論と呼ばれてきたものに該当する。すなわち、この章では、ロシア十月革命後の時代、帝国主義と社会主義への世界の分裂の時代における、諸国家及び社会的諸勢力の相互関係の特徴とプロレタリアートの革命運動がとるべき方向について一般的に述べられている。

⑩、⑪、⑫、⑬、⑭は、過渡期世界における諸国家及び社会的勢力の相互関係の特徴を一般的に規定づけている。

まず⑩において、帝国主義戦争の必然的産物たるプロレタリア

点は、ドイツにおけるナチスの勝利とドイツ共産党の崩壊である。それ故、我々は世界革命の趨勢を正しく押し進め、必ずや世界プロレタリア独裁を闘いとするために、第二次帝国主義世界大戦へ至る過程における国際共産主義運動から教訓を引き出さねばならない。それと同時に、我々は我々の綱領に、帝国主義世界大戦にも首尾一貫したマルクス・レーニン主義の見地から対処しえる内容を盛り込んでおく必要がある。

以下、その中の重要な諸問題で、理論的分析を深化し提起しよう。

### ⑭の民族解放運動の性格について

かつてレーニンは「植民地とヨーロッパ諸民族との間の経済的區別は以前には植民地が商品交換にまきこまれながら資本主義的生産にまきこまれていないところにあった。帝国主義はこれを変化させた。帝国主義はとりわけ資本の輸出である。資本主義的生産は増々急速に植民地に移植されつつある。ヨーロッパの金融資本に対する依存性から植民地を切り離すことはできない。」(自決に関する討論の決算)と述べた。帝国主義は植民地・被抑圧民族を従属させ帝国主義の世界経済にますます緊密に結びつけ、略奪と圧迫とを耐えがたいまでに増大させる。だから又、帝国主義はその軛からの解放を求める被抑圧民族の闘争を激化せざるをえない。「この特質は帝国主義的略奪をこうむっており、帝国主義的巨大大国のために分割され圧殺される脅威に面している国々で、深刻な革命運動の発生をある程度まで容易にしており、これに反して、多くの植民地や外国を帝国主義的に略奪し、それによって自国の住民の非常に大きな部分(比較的にいって)を帝国主義的獲物の分けまえにあずからせている国々で、深刻な革命運動の発生をある程度まで困難にしている。」(「党綱領の改正によせて」)

第一次帝国主義戦争の結果「ヨーロッパの資本主義諸国は、あ



る国家が他の国家によって搾取され、又、帝国主義戦争で敗北した国のうちの第一のものの搾取が東洋全体の搾取と結びつくことによって発展を完了し、同時に「東洋はまさにこの第一次帝国主義戦争のために最後の革命運動に入りこみ、全世界の革命運動全体の循環に最後の引き入れられた。」こと、このことから「全世界が今ではもう全世界的社会主義革命を生み出すに違いないような運動に移っている」こと、そしてこの「闘争の結末は全体としてみれば地球上の住民の絶大な多数が、結局のところ当の資本主義によって闘争するように訓練され、教育されるといふ根拠にもとづいてのみ予見することができ、と、闘争の結果は結局のところ、ロシア・インド・中国などが住民の圧倒的多数を占めていることにかかっている。ところがまさにこの多数の住民が、近年、異常な早さで解放闘争に引き入れられており、従ってこの意味では、世界的闘争の終局的解決がどうなるかについては、いささかの疑問もありえない。この意味では社会主義の終局的な勝利は完全に又無条件に保障されている。」とレーニンは死の直前に予見している。更にこの世界的な闘争が「反革命的帝国主義的西欧（米・日を含めて）と革命的民族主義的東洋との、世界の最も文明化された国家と、東洋風に遅れた、だが多数を占めた国々との軍事的衝突が次に起る。」こと、即ち、民族主義的戦争に進んでいくことを予見している。（量は少くとも質のよいものを）事態はまさにそのように進んだ。中国・朝鮮・ベトナム・インドシナで、そして今ではアジアだけではなく「第三世界」のあらゆる地域がこの嵐に不可避に巻きこまれている。

「人間としてのぎりぎりのところに押しつめられた数億の被搾取労働住民」、前資本主義的「地主制的に鞭による搾取と国際帝国主義（及び高利貸的・買弁的ブルジョアジー）」のむごたらしい略奪・収奪によってふみにじられた数億の労働被搾取大衆が世界的な解放闘争にひき入れられていること、そしてこの点に、世界

プロレタリア共産主義革命の時代の根本的な特質とその勝利の条件が存在する。そして我々は民族解放運動の性格の変化について述べておかなければならない。帝国主義は、被圧迫従属諸国民の反対闘争を「民族革命運動」（コミンテルン二回大会、民族植民地問題テーゼ）とでもいうべきものに転化させていること、そして世界プロレタリア共産主義革命のはじまりは、この民族革命運動をプロレタリアートと共産党が指導し、国際プロレタリアートの闘争と結びつけることによって世界プロレタリア共産主義革命の「一環に転化したのである。そして、このような事態は一方ではこれら諸国に於いて「資本主義的發展の段階をとびこえて」社会主義へ移行する条件をつくりだしたのである。レーニンは「社会主義を建設するために、一定の文化水準が必要ならば、なぜこの一定の水準のための前提を、まず革命的方法で獲得することから始め、その後で労働権力とソヴェエト制度をもとにして、他の国民に追いつくために前進してはいけぬのであろうか。」その人口がはかりきれない程多く、社会的条件の多様な点でもはかり知れない程特色をもっている東洋諸国の将来の革命が、疑いもなくロシア革命よりも大きな独自性を示さざるを得ない。（「わが革命について」と述べているが、まさにこの様な予見は、中国革命によって、そしてベトナム・朝鮮やキューバでETC、に於て次々と実現された。このように民族解放闘争の性格の変化が、他方より一層世界プロレタリア共産主義革命の前進をつくりだしたのである。ここでこの内容について詳しくふれることはできないが被圧迫従属諸国に於るプロレタリア独裁の樹立は、スターリン主義・現代修正主義の、革命の型の機械的分類・二段階革命論とは全く相入れないものであることについて指摘しておきたい。）

⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

ロシア革命によって開始された世界プロレタリア共産主義革命の前進に対して、ブルジョアジーは、全ての国のプロレタリア

トの革命運動や民族解放運動を直接に鎮圧し、全世界の人民を系統的に搾取し収奪する国際的な機構をつくりだした。第一次大戦後の於るヴェルサイユ体制、国際連盟がそれであり、第二次大戦後は一層巨大で一層包括的な国際的統合の形態をつくりだされた。日米安保、NATO等の軍事同盟、IMR、GATT、世界銀行、国際連合等である。

これらの資本家の国際的統合機構は、帝国主義諸列強の矛盾、対立、争奪を廃止したわけではない。逆に、これらの矛盾、対立、争奪の上に築かれている。資本主義と帝国主義の基礎の上では、これらの矛盾、対立をなくしたり、各国の国家権力を解消して単一の世界権力をつくりだすことは不可能である。もしそれができれば、もはや資本主義とも帝国主義ともいえなくなるであろう。資本家の国際体制はしたがって、諸列強の矛盾、対立、争奪の上に立って、その力に応じて組織されており、したがって又、力に応じてわけまえを分どりあう以外にない。だから、この国際体制は、永久不変のものではなく、逆に、たえず流動しており、力関係が変化することによって必然的に再編されるをえない。

第一次大戦後のヴェルサイユ体制は、主軸となったイギリス帝国主義が没落への道を歩んでいたことと、国際階級闘争の激化によって短命に終わった。ナチスの勝利と帝国主義の世界再分割戦—第二次帝国主義世界大戦がその帰結であった。第二次大戦は、革命の力が未だ弱く、又、コミンテルンの現代修正主義への変質によって革命が挫折、敗北し、後退させられたことによってもたらされた歴史の後方への逆もどりを意味している。（ドイツ革命の敗北—ナチスの勝利が戦争を決定的にした。）第二次大戦は、国際反革命体制が決して帝国主義戦争を不可能にするものではなく、プロレタリアートがこれを革命的に解体しえない場合には、それは反動的に解体し、帝国主義世界大戦に突き進むことを示している。

だが同時に、帝国主義は社会主義革命の前夜であるという真理も、この戦争のなかでいかに実証された。第二次大戦は、全世界のプロレタリアート。人民の反抗を増大させ、その中で中国をはじめいくつかの植民地、半植民地において民族解放・社会主義の闘いが勝利し、プロレタリア独裁が樹立された。世界プロレタリア共産主義革命は再び偉大な発展期を迎えた。

帝国主義は、世界の再分割体制を固め、革命の発展に対抗して新たな国際反革命体制を組織した。この体制は、二つの大戦を通じて強大化した米帝国主義の圧倒的な政治、軍事、経済力を軸にして、他の帝国主義が多かれ少なかれそれに依存し従属することによって補強されている。したがってそれは、ヴェルサイユ体制に比べて比較にならぬほど全面的で系統的であり、強大になっている。又、ソ連が現代修正主義—社会帝国主義に転化し、帝国主義と結託して世界プロレタリア共産主義革命に敵対し、同時に社会主義の仮面をかぶって国際プロレタリア・人民の闘争を利用して帝国主義と世界支配のための争奪を行なっているという事情が加わって、革命の困難も又増大している。

だが、六〇年代以降、ベトナム、インドシナ革命戦争や中国プロレタリア文化大革命、民族解放運動の飛躍的發展などが実現され、国際反革命体制が大きな後退と再編を余儀なくされた。他方、帝国主義の不均等発展は、米帝の地位の相対的低下を招き、米帝の圧倒的力によって支えられていた国際反革命体制は大きくゆらぎ、諸列強の対立が激化し、国際通貨体制も危機にさらされている。これと関連して先進帝国主義に於る諸矛盾が激化し、プロレタリアート、被搾取労働大衆の反抗もますます増大している。帝国主義と社会帝国主義の結託と争奪も又激化している。こうして、帝国主義世界大戦の危険も又依然として存在している。革命が後退し、圧殺された時には、この危険は現実に変化するであろう。だが、当面の世界の主な傾向は革命である。革命の

勢いは、一時的に弱まったり或いは迂回したりはしても、なお衰えず帝國主義心臓部に迫りつつある。國際プロレタリアートの任務は、この革命の勢いを更に正しくおし進め、世界プロレタリア共産主義革命の究極の勝利まで前進することである。

そのためには、國際プロレタリアートの緊密な兄弟的同盟が不可欠である。スターリン主義、現代修正主義によって解体された國際共産党の旗が今や高々と掲げられなければならない。再建されるべき國際共産党の任務は、世界プロレタリア共産主義革命を究極の勝利までおし進めることであり、その不可欠の条件としての世界プロレタリア独裁を闘いすることである。

綱領の理論的部分は最後に次のように結んでいる。「革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、又反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利はさけられない。」

②スターリン主義、現代修正主義、ソ連社会帝国主義について  
スターリン主義の発生は、現代修正主義の発生である。中國共産党が主張したように、スターリン死後、フルシチョフが突如としてソ連共産党を現代修正主義に転化し、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に転化したのではない。スターリン時代に於て、マルクスレーニン主義を体系的に歪曲し、プロレタリアの階級闘争が發生し、成長し、フルシチョフ以降、一層ブルジョア的に完成されたのである。そして現代修正主義は、社会帝国主義に転化した。現代修正主義、ソ連社会帝国主義は世界プロレタリア共産主義革命への根本的な敵対物である。これと、原則的に、断固として手を切り、仮借なく闘い、打倒することなしには、世界プロレタリア共産主義革命の勝利はありえない。ここでは、綱領、戦術組織に於る修正と歪曲の体系を暴きだし、その成長、発展の過程

るだけでは、ブルジョアとプロレタリアの特殊な歴史的性質は何も明らかにされない。搾取というのは、奴隷社会でも、封建社会でも存在したし、地主と農民の場合にも存在している。だから搾取の内容そのもの、搾取の存立する条件そのものを分析しなければプロレタリアの歴史的な経済的地位は明らかにならない。第二に、資本家と労働者が商品交換関係だから、資本家が剰余価値を搾取するといふのも又何も説明したことにはならない。このような説明では、労働力の売買が、流通に属する仮象であり、資本の賃労働に対する支配の形式であるといふことは明らかにされない。資本家は、単に労働者から労働力の価値以上の価値を、即ち剰余価値を搾取するだけではない。労働力に支払われる価値も又労働者の過去の不払労働なのであって、したがって、それは「征服者が、被征服者からとりあげた貨幣で、被征服者から商品を買う」ようなものである。それは商品交換とはいえないのである。第三に「資本家がプロレタリアの労働力を買う」のは「生産用具と生産手段の私有が資本主義体制の基礎をなしているから」にするのは、資本発生を説明することではあっても、「資本の現在の現実化」の条件を説明したことにはならない。なぜなら、本源的蓄積によって資本家が「生産用具と生産手段」を所有していたとしても、この本源的資本は一定期間のうちに消費しつくされ、原価値はなくなってしまうのであって、問題は、それにもかかわらず、資本家が生産手段を所有し、或いは新たに買入れ、労働者をひき続き雇い入れて生産することができるとの根拠自体を、資本の生産過程の分析から導きださねばならないのである。「即ち、単純再生産でも、長短の期間の後には、どの資本をも必然的に蓄積された資本、または資本化された剰余価値に転化されるのである。資本そのものが生産過程に入ったときには、その充用者が自分で働いて得た財産だとしても、おそかれ早かれ、等価なしで取得された価値、または貨幣形態にあるうとなかろうと、他人

を明らかにする。

(1) スターリン主義、現代修正主義、社会帝国主義の最も深い根拠は綱領の原則的部分に対する第二インター流の経済的歪曲である。従来のスターリン主義、現代修正主義批判は反スタロツキズムや中共派を含めて、この根本において批判しえず、むしろ同根といつてもよい程度のものであり、したがって部分的な批判にとどまっていた。だから、我々はなによりも最初のべたようにこの点に於る批判を行うことによってこそ、最も徹底した、断固たる批判たりうると考える。

スターリンは、初期の頃から一貫して資本主義批判に於て、ブルジョアとプロレタリアの関係を搾取一般で説明することにとどめ、そこから分析をすすめないでたえず「史的唯物論」に解消し「社会発展の法則」を説明することで、PrとPrの関係を明らかにしてきたかのうに考えている。一九〇六―〇七年に書かれた「無政府主義か社会主義か?」は、終生ほとんど変わらなかつた彼の経済学、史的唯物論及び戦術の基本思想を典型的に示している。ここでは、まず、資本主義がプロレタリアと資本家の陣営に分かれていて貧富の差があること、それは、資本家がプロレタリアを搾取するからとされる。この搾取の理由は「資本主義体制が商品生産のうえにたてられてゐるから」、つまり、資本家と労働者の関係が商品交換の関係というふうに抱えられる。そして、資本家がプロレタリアの労働力を買うのは「生産用具と生産手段の私有が資本主義体制の重要な基礎をなしているから」だと説明される。更には資本主義が「非組織性」として片づけられ、「この非組織的な社会体制が、いまだに破壊されず、それがいまだにプロレタリアートの攻撃にたいして頑強に対抗しているとしても、これは、なによりもまず、資本主義国家、資本主義政府がそれを擁護しているからだ」と説明するのである。ここでの誤りは何か? 第一にブルジョアとプロレタリアの関係を搾取と被搾取と説明す

Pr

の不払労働の物質化になるのである。」(資本論五九五頁) だから、「資本主義的生産過程は、関連のなかでみえるならば、すなわち、再生産過程としては、ただ商品だけではなく、ただ剰余価値だけではなく、資本関係そのものを、一方には資本家を他方には賃金労働者を再生産する。」(資本論六〇四頁) ことが明らかにになり、資本家に対する労働者階級の経済的隷属が明らかになるのである。第四に、「プロレタリアの経済的隷属が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲慘、精神的退化、政治的隷属の根底にある」ということがここから導かれるが、スターリンは、これをさかだちさせて「政治的隷属が、プロレタリアの経済的隷属がある」というふうに一面化するのである。ブルジョア国家権力は、資本家階級に対する労働者階級の経済的隷属を根底にして、即ちブルジョアとプロレタリアの階級対立の非和解性の産物として生みだされ、このブルジョア階級支配を維持するための道具として「社会の上に立つ」特殊な機構、社会の寄生体として転化してゆくこと。だから、プロレタリアは、自己の経済的解放という大目的のために、まずもって、このブルジョア国家権力を打倒し、政治権力を獲得し、プロレタリア独裁を樹立し、それを手段として社会革命をおし進めねばならないのである。スターリンのさか立ちした一面的な理解は、戦術に於る経済主義的歪曲、二段階戦略に導いてゆくことになるが、この点は後でみることにして次に進もう。(以上のような誤った資本主義批判は、五二年論文、「経済学教科書」にひきつがれ、拡大されている。)

(2) こうして、ブルジョアとプロレタリアの階級対立、プロレタリアの経済的隷属と社会革命の条件の形成について明らかにしえなかつた結果、この後に、スターリンは、社会主義社会を未来社会論として展開することになる。(これ自体、多くの誤りを含んでいる。)そして、「社会主義体制の確立が不可避である」という証明を次のように展開する。「歴史は、所有形態が生産形態

に直接依存することを示している。したがって生産形態が変化すれば、それにもない所有形態もおそれやかれ不可避的に変化する。」という命題をたて、資本主義のもとで、「生産過程は社会的、集団主義的性格をおびてきた。ところで取得の私的性格は生産の社会的性格に照応しないし、また、現代の集団主義的労働はかならず集団的所有をもたらずはすである。したがって社会主義体制が夜のあとに昼がつづくと同じように不可避的に資本主義のあとに続くだろう」ということは自明のことである。」というわけだ。こうして資本主義批判から、プロレタリアの地位を明らかにしえなかつたスターリンは、後に「史的唯物論」として体系化される「社会発展の法則」によって社会主義革命を論証しようとしたのである。後にかかれた「弁証法的唯物論と史的唯物論（一九三八年）」では、まず「弁証法的唯物論」を社会に適用したものが「史的唯物論」である、というふうに一面的に扱えらる。その上で、先に述べたところと同じ観点、生産形態と所有形態、生産力と生産関係の矛盾で歴史を解釈し、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争にそれを「適用し」、「生産の社会的性格と取得の私的性質との矛盾」が導かれ、社会革命が必然的であるとされるのである。（なお、ここでも『搾取する者と搾取される者とのあいだのもっとも尖鋭な階級闘争が、資本主義制度の基本的な形態をなしている』という観点で貫かれていて。）スターリンの独特な「史的唯物論」は根本的に誤っている。マルクス唯物史観は、彼の経済学研究の導きの糸となつたが、経済学による「近代社会の経済的運動法則の解明」によつて、はじめ、科学的に基礎づけられたこと。唯物史観は、観念的な歴史観に対する批判としてなされたものであつて、社会の物質的諸関係の解明は経済学（批判）によつてのみ明らかにされたのであり、プロレタリアートの歴史的地位と社会革命も又、ここから導きだされたのである。「マルクスは、資本主義社会が社会主義社会に転化することは避けられない」という結論を、まった

く、もっぱら近代社会の経済的運動法則から導きだしている。労働の社会化は、幾千の形態でますます急速に前進しており、マルクス死後の半世紀の間に、大規模生産の成長、資本家のカルテル、シンジケートおよびトラストの成長にも、また金融資本の規模と威力の非常な増大にも、とくにまさまざとあらわれているが——これこそ、社会主義がかならずくるということの主要な物質的基礎である。この転化の知的、精神的な原動力であり、この物質的な執行者であるのは、資本主義そのものによつて教育されるプロレタリアである。」（『カール・マルクス』）このように、マルクスもレーニンも社会革命の不可避性を「全く専ら、近代社会の経済的運動法則から導きだし」たのに対して、それに失敗し、ブルジョアとプロレタリアの関係を搾取一般に解消したスターリンは、その欠陥を「史的唯物論」をもちだすことによつて補おうとしたのであるが、それは資本主義批判の誤りを一層体系化するものでしかなかった。まさに、スターリンは、「労働者に前夜の社会的災禍を打破する能力を与え、また打破せざるをえないようにする物質的その他の諸条件が、いかにして現在の資本主義社会のなかでつくりだされたかをここでばつきりと論証すべき」（『ゴータ綱領批判』）であつた。それができなかったスターリンは、プロレタリアの社会革命についても「集団主義的労働が集団所有をもたらず」としてしか規定できなかったのは当然であつた。

(3) 以上のようなスターリンの基本的見解は、経済主義的政治と二段階戦略に不可避に導いてゆく。彼は、社会主義を実現するには、「資本主義的生産のいっその強化と社会の大多数のプロレタリア化」が必要であり、更にそのうえに「階級意識とプロレタリアの団結と自分のやるべきことをみちびいていく能力」が必要とされるが「これら全てを獲得するためには、さらに、いわゆる政治的自由つまり言論、出版、ストライキ、結社の自由、要するに階級斗争の自由が必要となる。」とされ「現在の諸条件のもと

では、マルクス主義の綱領が社会主義を目的とする最大限綱領と、民主共和制をへて社会主義への道を開くことを目的とする最小限綱領の二つの部分にわけられる理由はここにある」と説明している。だがこれは、まったくさか立ちした考えである。スターリンの見解では、政治的自由がなければプロレタリアは階級意識と団結と社会革命の能力をもちえないかのようにならなければならないが、これは全く誤っている。プロレタリアは自己の経済的地位からして必然化される社会革命＝共産主義革命のために闘うことができるが故に（即ち「ブルジョアに對立している階級のなかでひとりプロレタリアだけが、真に革命的な階級である」『共産党宣言』が故に）民主主義のための先進闘士ともなりうるのである。レーニンは、ロシアのプロレタリアートがブルジョア階級に経済的に隷属していることから必然化されるプロレタリアの社会革命を実現するために、プロレタリアを「全ゆるブルジョア政党に對立する独自の階級政党に組織し、このプロレタリアの社会革命のための障害物となつてゐるツァーリ専制を打倒し、政治的自由、民主共和制を実現することを当面するプロレタリアの政治的任務としたのである。スターリンは、このように民主主義革命から社会主義革命への転化ではなく、民主主義革命それ自体を完成することを自己目的化し、こうして民主主義革命と社会主義革命を完全に分離してしまう。この結果、最小限綱領と最大限綱領を全く分離してしまうのであるが、このような見解は、エルフルト綱領に典型的に表現される第二インターの見解と一致している。スターリンのこのような戦術思想は、彼がマルクス「水統革命」を継承したレーニンの「二つの戦術」をまったく理解しておらず、現実には一九一七年二月革命以後、レーニン帰国と「四月テーゼ」まで、臨時政府支持に導いてゆく。何故なら、スターリンは、民主主義革命それ自体の完成を自己目的化しているのであるから、臨時政府の支持→政治的自由、民主共和制の実現と完成（？）が目的とならざるをえないのである。一九二四年に書かれた「レ

ニン主義の基礎」の中で、スターリンは革命の発展を諸段階にわけ、この諸段階に応じて目標と勢力配置、主要打撃の方向について語っている。そして「一九〇三—一九一七年三月、目標——ツァーリズムを打倒し、中世的制度の残在物を完全に掃蕩すること」というふうに、民主主義革命において、プロレタリアと党が、いかなる党派性を刻印するのか、或いは刻印したのかではなく、一般的に民主主義革命に於ける獲得目標を述べているにすぎない。スターリンは「二つの戦術」と「四月テーゼ」が全く矛盾しないものであることが、全く理解できていない。そして彼は、彼の「史的唯物論」＝社会発展の法則によつて「革命の発展法則」が基礎づけられるかのように考えており、彼の「戦術、戦術」は、レーニンが厳しく批判したところの「過程としての戦術」に他ならない。スターリンの戦術思想は、コミンテルンの「スタ・フハ綱領」（一九二八年）によつて定式化され、世界革命の敗北に導く大きな要因となる。第二次大戦後に於ける、仏伊レジスタンスの解放後の武装解除、ブルジョア民主主義への屈服、投降路線、更に中国国内戦勝利後に於ける劉少奇の議会民主制、資本主義育成路線はスターリン路線の典型的な表現であつたといえる。

#### (4) スターリン「一国社会主義論」の批判

スターリンの以上のようなプロレタリアートの階級闘争＝共産主義革命＝プロレタリア独裁の歪曲、事実上の否定は、プロレタリア独裁下の革命と階級闘争の継続についての全的な否定の体系に導いていく。

④レーニン死後、トロツキーら反対派との党内闘争のなかから一国社会主義建設可能論がうちだされ、しだいに拡大されてゆく。スターリン、ブハーリン、ブロックの反対派圧殺の象徴たる一九二八年コミンテルン六回大会綱領では、

④前述した「無政府主義か社会主義か」の中で共産主義社会を「あるべき未来社会」として描きだそうとした志向と、一九年綱領論争時に、最小限綱領の削除・発展した共産主義社会の特徴づけを行おうとしたブハーリンの志向とが結合して、バラ色の未来社会論が展開されている。だがそれは足下の脆弱性を暴露する以外のものではなかった。

⑤他方、「社会主義の下では、生産力は労働生産物が必要に応じて分配されることを可能ならしめるほどには十分発達していない。」というふうに、マルクスが「権利は社会の経済的構成及びそれによって制約される文化の発展よりも高度であることはできない。」（「ゴータ綱領批判」四五頁）と注意深く述べているところを単に生産力の問題に解消してしまっている。そして、分業、精神労働と肉体労働、国家権力、法律等、の残存が羅列され、「不平等の若干の遺物は未だに存在する。」とされる。これでは、共産主義社会の第一段階に於て何故ブルジョア的母胎が残り、どのような限界をもっているのかが見失われてしまふ。

⑥したがって、「分配は仕事量に応じて行われる」とだけ述べて、六項目の社会的控除についても全く注意をむけていない。ラッサールの「公正な分配」「労働収益」なる主張が何故にマルクスによって批判されたのか？これでは「分配だけしか眼中にない。」（同四十四頁）と批判されても仕方がない。

マルクスは、社会的総生産物から六項目の控除を行なった残りの部分が個人の消費資料にまわされるとしている。前半三項目（③生産手段の補填④生産拡張⑤生産の予備元本）は、「経済上の必要であって、この控除の量は、もちあわせている手段と力とに応じて、また一部は確率論によって、決定される。」とされている。後半三項目（⑥一般行政費⑦学校や衛生設備のようないろいろな欲求を共同でみたすのにあてられる部分⑧労働不能者等のための元本）は、純粹な経済上の必要ではない以上計算によって

算出できるものではない。⑥は「最初から、今日の社会にくらべていちじるしく増大し、そして新社会が發展するにつれてますます増加する」（同四十二頁）とされており、また意識的に増加させねばならないのだから、等量労働交換の分配だけをみて、これを絶対化、神聖視するのは明らかにブルジョア的近視眼でしかない。まさに、このような個人的消費資料の分配は、「社会の経済的構成及びそれによって制約される文化の発展」からさけられないブルジョア的不平等なのであって、この六項目の社会的控除自体が、この分配そのものを絶対化、固定化しようとする種々のブルジョア的抵抗との闘争として貫かなければならないのである。

⑦このような誤りは、第二段階への生産力發展による自然成長的移行論として必然化される。即ち、生産力の發達と、自然力征服、共産主義の精神教育によってこれらの遺物が消失し完全な共産主義へ前進するとされる。

レーニンはどうに言っているだろうか？「国家が完全に死滅しうるのは」即ち共産主義社会の高度の段階を實現しうるのは、「社会が『各人はその能力に応じて、各人にはその欲望に応じて』という準則を實現するとき、すなわち、人々が能力に応じて自発的に労働するほどに、共同生活の根本原則を守ることによって、彼らの労働がそれほどに生産的なものになるときである。他人より半時間でもよいには働かないように、他人よりよくない報酬を受けとらないように、とシャイロツク流の冷酷さで人にそればん玉をはじかせる『ブルジョア的権利の狭い視野』」この狭い視野は、そのときふみこえられるであろう。そのときには、生産物を分配するにも、各人のうけとる生産物の量を社会のがわから規制する必要がなくなり、『各人はその欲望に応じて』自由にとるであろう。」

レーニンのこの観点とスタ・ブハ綱領との差異は明白である。スタ・ブハ綱領では「生産力の發展」が全ての主語になっている。

レーニンの場合には、「人々が能力に応じて自発的に労働するほどに、共同生活の根本原則をまもることに慣れ、彼らの労働がそれほどに生産的なものになるとき」となっている。生産力の發展は共産主義の不可欠の条件ではあるが、それだけでは決して自然に共産主義をもたらすものではない。生産力が發展したとしても、欲望も又それだけ急速に増大するであろう、「労働に応じて分配」を絶対化することからは、それこそシャイロツク流の「ブルジョア的権利の狭い視野」をこえることはできないであろう。スタ・ブハ綱領は、事実上、このような「ブルジョア的権利の狭い視野」に陥っているのである。

⑧レーニンのこのような指摘は次のような確信に支えられている。

一九一九年の「偉大な創意」のなかで、レーニンは、プロレタリア独裁、その革命的暴力の経済的基礎、「その生命力と成功の保障であるのは、プロレタリアートが、資本主義にくらべていっそう高度な型の、社会的労働組織を代表し、實現しているというところである。ここにこそ核心がある。ここにこそ力の源泉があり、共産主義の不可避的な、完全な勝利の保障がある。」（「労働組合論、中」所収、八五〇頁）と述べている。そして、農奴制や資本主義の社会的労働組織が、それぞれ、「鞭の規律」や「飢えの規律」によって支えられていたことと対比して、「共産主義的な社会的労働組織」は地主のくびきをも資本家のくびきをも投げ捨てた勤労者自身の、自由で自覚した規律に支えられており、さきに進めば進むほどそうなるであろう。（同八五〇頁）と指摘し、「彼ら自身の団結の力と、彼ら自身のより自覚した、大胆な、結果した、革命的な、訓練を経た前衛のほかに、自分のうえにたつどのようなくびきも、どのような権力もたない、自覚し、団結した労働者の規律」こそが共産主義の勝利の保障であるとしている。このような観点から「共産主義土曜労働」（無償労働）を「共産

主義の事実上の発端」（同八六〇頁）とまで評価している。

第一段階の「ブルジョア的権利の狭い視野」だけからしか共産主義社会を見ることができない俗物には、レーニンのこのような観点は到底理解できないに違いない。共産主義社会はこのような自覚し団結した労働者の規律のうえにのみ築かれる。そして自発的な、自覚し、団結した労働者の規律こそが生産力をも發展させるのである。

なお、レーニンはその際、「全ての『勤労者』に一樣にこの仕事を果たす能力がある」と考えるのは時代おくれのマルクス以前の社会主義者のこのうえもない空文句か幻想である。なぜなら、この能力はひとりであらえられないのではなく、歴史的に成長し、しかも大規模な資本主義的生産の物質的諸条件からだけ成長するものだからである。資本主義から共産主義にうつる道のはじめには、この能力をもっているのはプロレタリアートだけだからである。（同八五三頁）とプロレタリアートと他の勤労大衆とを厳格に区別し、プロレタリアートの階級的独自性を強調していることを特に銘記しておく必要がある。

我々は第一段階から第二段階への移行がどのような過程とどのような速度で進むかを予測することはできない。我々が明らかにしうるのは原則的なことだけである。スタ・ブハ綱領はまさに原則を忘れ投げ捨てたために必然的にたえず過程の説明におちこみ、未来社会を描きだそうとする破目におちいっている。スターリン主義はレーニンの一貫した見地を理解できなかった。そして、自覚し、団結した労働者の規律にかわって、官僚的、行政的な強制力・鞭の規律としばしば飢えの規律と結びついた物質的刺激とを併用するようになる。この上に立つ生産力が資本主義の飢えの規律よりも劣っていたとしても何ら不思議ではなく、スターリンの後継者達が生産力發展のためにますます資本主義の飢えの規律を採用せざるをえなくなったとしても驚くにはあたらない。



◎以上のことと関連して、スタ・ブハ綱領は、「共産主義社会の将来の国家組織についても何も論じていない。」（「ゴータ綱領域批判」五十六頁）という欠陥マルクスが批判したゴータ綱領と同じ欠陥をもっている。

マルクスは、「国家組織は共産主義社会においてはどんな転化をこうむるか？」いいかえれば「そこでは今日の国家機能に似たどんな社会的機能がのこるか？」（同五十六頁）と問いを投げかけている。マルクスは、直接にはこの問いに答えてはいないが、全体の脈落をくめば自ずから明らかとなる。レーニンがマルクスを継承して、この問いに答えている。

共産主義社会の第一段階に於ては「ブルジョア的権利」以外の規準は存在しない。そしてそのかぎりでは、生産手段の共有を保護しながら、労働の平等と生産物分配の平等とを保護する国家の必要はなおのこっている。資本家はもはやなく、したがってまた、どの階級を抑圧することもできないというかぎりでは、国家は死滅する。しかし、国家はまだ完全に死滅したのではない。なぜなら、事実上の不平等を神聖視する「ブルジョア的権利」の保護がまだのこっているからである。国家が完全に死滅するためには、完全な共産主義が必要である。（「国家と革命」一三三頁）「消費手段の分配についてのブルジョア的権利は、もちろん、不可避免的に、ブルジョア国家の存在をも予想する。なぜなら、権利なるものは、権利の規準の遵守を強制しうる装置がなければ、ないのも同然だからである。」（同一三八頁）このようにレーニンは第一段階に於ける国家とその死滅のための諸条件について論じている。

「計算と統制」これが、共産主義社会の第一段階が「具合よく運営される」ために、たゞしく機能するために必要とされる主要なものである。ここでは、全ての市民が、武装した労働者である国家にやとわれる勤務員に転化する。すべての市民が、一つの全人民的な国家的「シンジケート」の勤務員および労働者となる。

ておこなわれる急速な、ほんとうの、真に大衆的な前進運動がはじまる。（同二三九頁）のである。我々は、第一段階から第二段階への移行とは自然的過程としてではなく、「ブルジョア的権利の狭い視野」の限界自身と、したがって又、その国家組織自体を止揚するための、意識的な「真に大衆的な前進運動」として理解しなければならぬ。

なお、スターリン主義のこの点に関する欠陥は、共産主義社会の将来の国家組織とプロレタリア独裁国家とを同一視する誤りにまで拡大される。（後述）

③スターリンの一国社会主義論はしだいに拡大され、農業集団化の「達成」の後には、スターリンは「ソ連にはもはや敵対する階級は存在せず」「階級衝突は存在しない。」と宣明し、一九三六年スターリン憲法は、「社会主義社会の勝利」を宣言した。

一九五二年の「ソ同盟に於ける社会主義の経済的諸問題」では、都市と農村、精神労働と肉体労働に於ける「対立」と「相違」（「相違」のなかでも「本質的なもの」と「そうでないもの」との区別）とを区別し、「社会主義社会」であるソ連では、これらの対立は既に消滅しており、残された課題は、「（本質的）相違」の消滅であるとした。その内容は、都市と農村との「相違」については「コルホーズの所有の消滅→全人民的所有への再編」によって消滅させるとし、精神労働と肉体労働の「相違」については、「労働者の文化」技術水準の向上」によって消滅させるとしたのである。こうしてスターリンは、「社会主義的所有」の全人民的所有への一元化共産主義的「所有」と、「文化・技術教育」に共産主義社会の高度の段階をみるに至ったのであり、事実上の「一国共産主義論」へのレベルが敷かれるのである。これらの諸点について順次検討していこう。

④スターリンは、プロレタリア独裁期と共産主義社会とを混同し、プロレタリア独裁を「共産主義社会の将来の国家組織」とを同

必要なことは、彼らが仕事の基準をたゞしくもって、平等に働き、平等の賃金をうけとることだけである。これを計算し、これを統制することは、資本主義によって極度に単純化され、監督や記録、算術の四則の知識や適当な受領証の発行といったような、読み書きのできるものならだれにでもできる、きわめて簡単な操作にかえられている。」（「国家の機能のことも主要な部分が、労働者自身によるこのような計算と統制に還元されるようになるれば、国家は「政治的国家」たることをやめて、『公的諸機能は、政治的な機能から単純な管理機能に転化する。』（同四一頁））

そして「すべての人が社会的生産を自主的に管理すること、まなび、そして実際にもこれを管理し、計算を自主的にこなす、奇食者、どら息子、詐欺師、およびこれに類した『資本主義の伝統の保持者』にたいする統制を自主的にこなすようになる」と「人間のあらゆる共同生活の簡単で基本的な規則をまもる必要はきわめてすみやかに習慣となるであろう」と述べ、次のように結んでいる。「そしてそのときには、共産主義社会の第一段階からその高度の段階へ、それとともにまた国家の完全な死滅へ移行する扉はひろくあけはなれたるであろう。」（同四三頁）

スタ・ブハ綱領は、このような「共産主義社会の将来の国家組織」については全く目をむけていない。第一段階から第二段階への生産力発展による自然成長的移行論からはこのような問題を考察すべき必要も必然性もない。読者は既にお気づきであろう。レーニンが述べた生産手段の共有を保護しながら、「労働に応じた」個人的消費資料の分配を実施する統制機関（そこでは計算と統制が主要な機能）とは、「自覚し団結した労働者の規律」に基づいて組織された社会的労働組織なのである。そして、スターリン主義が「社会主義をなにか生命のない、硬化した」ものと捉えるのと違つて「実際には社会主義からはじめて社会生活と個人生活のあらゆる分野で、住民の大多数が参加し、ついで全住民が参加し

一視している。これは理論的には根本的に誤っており、実践的には有害である。

既にみたように、プロレタリア独裁と「共産主義社会の将来の国家組織」とをマルクスもレーニンも明確に区別している。まして、一国や数カ国の規模でプロレタリア独裁と国家とを廃止することなどできない。プロレタリア独裁が世界的な規模で決定的な勝利を収めていない段階では、プロレタリア独裁国家は、世界的な規模に於て帝国主義とブルジョア独裁と闘争し、国際階級闘争を遂行して世界プロレタリア共産主義革命の勝利のために闘わなければならない。国内的にみても、次の④で示されるが、絶滅されてはいないブルジョアジー、及び労働者階級に改造されてはいない広範な小ブルジョアジー、及びそれらが及ぼす労働者階級と党、国家機構の内部への腐食作用等と頑強に闘いぬき、政治、経済、文化、習慣etcの諸領域での革命と階級闘争を堅持しなければならないのである。そして、一国に於けるプロレタリア独裁は、国際階級闘争→世界プロレタリア共産主義革命の利益に完全に従属している。これを否定することはプロレタリア国際主義を否定することである。階級も国家も、ただ世界的な規模に於てのみ廃絶することができ、一方で階級闘争とプロレタリア独裁とを継続しながら、他方でそれを廃止するなどということができなくなる。うか？民族国家は、それがプロレタリア独裁国家であっても、単なる地理的区分ではなく、階級対立の非和解性の産物なのであり、階級支配の道具であり機関なのである。階級対立が廃絶されれば階級を抑圧する必要はなくなり、したがって国家も又死滅する。国家が存在することは階級対立が存在することの証明である。プロレタリアートの階級闘争は、階級（支配）の廃止→国家の死滅を終局目標としている。したがって、プロレタリアートは、世界の小国家への分立をなくし、諸民族の緊密な融合を実現するために闘う。世界プロレタリア独裁は世界プロレタリア共産主義革命の



条件であり、そこでは当然民族国家の枠は廃止され世界的な中央集権国家が実現されねばならないが、この世界プロレタリア独裁国家も又、プロレタリアートがブルジョアジーを抑圧するために必要な国家なのである。共産主義社会はこの世界プロレタリア独裁の完遂の上のみ築かれるであろう。これは全く疑問の余地のないことである。それを否定するのはマルクス主義の否定である。スターリンは、ソ連を「社会主義社会」といふる美化することによって、階級闘争を放棄するに至るのである。

④過剰期IIプロレタリア独裁期の階級闘争をどのように評価すべきか、この点についてのマルクス・レーニン主義の見地と歴史的教訓とをまず明らかにしておかねばならない。

我々は「過剰期は死滅しつつある資本主義と生まれいようとする共産主義との闘争、いいかえれば打破されたが絶滅されていらない資本主義と、生まれはしたがまだ全く弱い共産主義との闘争の時期」(レーニン「プロレタリア独裁の時期に於ける政治と経済」)であると規定する。それ故、「プロレタリア独裁は、階級闘争の終結ではなく、新しい形でのその継続である。プロレタリアートの独裁は、勝利して政治権力をその手ににぎったプロレタリアートが、うちまかされはしたが、絶滅されてはいないブルジョアジーに対して、また、消滅してはあらず反抗することをやめていない、いな、その反抗をつよめたブルジョアジーに対しておこなう階級闘争である。」(レーニン「自由と平等のスローガンによる人民の欺満について」の出版への序文)

このプロレタリア独裁期に於ける階級闘争の根拠と現われは、第一に、資本主義、帝国主義は世界的に存在しており、これらの勢力の包囲と武力攻撃、侵略の危険及び政治的、経済的、金融的、イデオロギー的、文化的 etc、様々な形態と領域にわたる攻撃が加えられ、プロレタリア独裁国家のブルジョア的変質、「平和的」瓦礫の攻勢が強まり、様々な陰謀活動も又存在する。のみならず、一国に於るプロレタリア独裁の利益は、なによりもまず世界プロレタリア共産主義革命、国際プロレタリアートの利益に完全に従属していなければならない。単に自国のプロレタリア独裁を防衛するだけではない、国際帝国主義の打倒と全世界に於る単一の共産主義社会の実現、世界プロレタリア共産主義革命の最終的勝利のために、したがって又、その不可欠の条件たる世界プロレタリア独裁のために闘わなければならない。(誤った極左戦術や「攻勢論」、自国のプロレタリア独裁の放棄などを意味しないのは自明である。)これが、プロレタリア独裁期に於る階級闘争を継続しなければならない第一の根拠である。

第二に、打倒されたブルジョアジーと搾取者は、つねにあらゆる手を尽して奪いとられた彼らの天国をとりもどそうとしていること。ブルジョアジーはまだ絶滅してはあらず、簡単に絶滅されるものでもなく、未だ広範に政治的、経済的、イデオロギー的、文化的、社会的諸領域に於て根強い影響力と陣地をもっており、又、プロレタリアートや農民や国家機構、党のなかに入りこんで大きな影響力を放つことができる。「打倒されたが、絶滅されてはいない搾取者、ブルジョアジーは、国際的基盤が、金が、巨大な社会的つながりが残っており、国家行政や軍事行政や経済行政の「技術」は彼らに極めて大きい優越を与えている。」(前掲「政治と経済」)とレーニンは強い警告を放っている。

第三に、小ブルジョアジーの自然発生的な勢力はたえず新しい資本主義分子を生みだす。「小規模生産が資本主義とブルジョア階級をたえず、毎日毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしている。」(「共産主義に於る左翼小児病」)ブルジョアジーに対して立っている階級のなかで、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級であり、他の階級、とりわけ小ブルジョアジーは、ただ条件的な形でのみ、即ち、彼らがプロレタリアートの立場に移ってくる限りでのみ、革命的である。小ブルジョアジーは、自然

発生的には、資本主義と商品経済、私的所有を維持、擁護する基盤に立っている。だから、問題はこうたてられねばならない。

「プロレタリアートは、勤労農民と所有者としての農民とを、働き手としての農民と小商品人としての農民とを——働く農民と投機者としての農民とを——区別し、画分しなければならぬ。この画分のうちにこそ社会主義の全核心がある。」(同書)プロレタリアートは、農民が、資本主義と商品経済、私的所有と手を切り、プロレタリアートの側に移行するように、農民を指導し、教育し、援助し、改造しなければならぬ。農民の社会主義的改造とは、彼らを労働者階級に改造し、共産主義建設の担い手に転化することに他ならない。

第四に、ブルジョアジーの影響と、小ブルジョアジーの自然発生的な勢力と腐食作用によって、党と国家機構、労働者階級の隊列のなかに、墜落、変質した分子や新しいブルジョア分子が生まれることもありうる。

「資本主義の残存物と小規模生産との上部構造である政治的影響が、他ならぬ労働組合の間に比較的根強いということである。これは小ブルジョア的の影響である。」(レーニン「NEPの条件の下での労働組合の役割と任務」)それだけではない。「資本主義は必ず一方では、社会主義への遺産として、労働者の間の古い、何世紀もかかってきた職業や職種の違いの差異を残し」「職業的な狭い見解、同職組合及び労働組合的偏向」をうけつぎ、「労働組合のいくらかの『反動性』は、プロレタリア独裁の下では避けられない。」(「左翼小児病」)したがってプロレタリアートは、「社会主義のために闘い、それとともに自分自身の欠陥とも闘う」ことが不可欠の任務である。

ロシア革命以降の国際共産主義運動Iプロレタリア独裁の経験は、プロレタリア独裁下の共産主義革命の継続に於て、党がその指導者であり統率者であり「水先案内人」であること、階級闘争

は党内に鋭く反映され、党が変質すればプロレタリア独裁の変質ブルジョア独裁への転化が、したがって、資本主義の復活が避けられないことを教えている。まさに、プロレタリア独裁に於て「政治は経済の集中的表現であり」「政治は経済に対して優位を占めるをえない」のであり、したがって「プロレタリア独裁とはプロレタリアートが政治を指導することである。」(レーニン「食糧税について」)

⑤スターリンは、このようなプロレタリア独裁下の階級闘争の見地を歪曲し、実質的に否定した。

彼は、その資本主義批判の誤り↓彼の誤った「史的唯物論」↓「社会発展の法則」をプロレタリア独裁下に於て適用し、プロレタリアートの階級闘争II政治以外に何か独自の法則でもあるかのように考えている。その結果「生産の社会的性格」に照応する取得の私的性質の社会的性格への転化II「社会主義的所有」としては、「(全人民的所有)と「ホルホーズ的所有」」これは、共産主義社会の第一段階に於る「生産手段の共有」とプロレタリア独裁国家への生産手段の集中とを同一視する誤りである。スターリンの所有理論は、近代所有制度のブルジョア的観念にとりつかれたものに他ならず、プロレタリア独裁下に於て、「政治の経済への優位」を逆転させ、「経済の政治への優位」に導かざるをえない。

⑥の観点との関連からみるならば、

第一の点に於ては、スターリンはソ連では「階級衝突」「敵対する階級」は存在しないとし、ただ帝国主義の武力干渉の危険と結びついたものとしてのみ階級闘争の存在を認めている。これは、世界プロレタリア共産主義革命の利益をソ連一国の利益だけに従属させ、プロレタリア国際主義をふみにじるものであって、コミンテルンをソ連共産党の出先機関・ソ連政府の外交の道具、ソ連防衛の道具に転化し、後には、米英帝国主義の御機嫌をとる

ためにコミンテルンの解散にまで進むのである。同時にそれは、プロレタリア独裁下の階級闘争を一面化し、完全に否定するものに他ならない。

第二の点に關しては、「搾取階級を一掃した」としているのは、ブルジョアと搾取者の抵抗を過少評価し、事実上ブルジョアととの闘争を放棄し、資本主義への道を切り開くものに他ならない。ブルジョアとプロレタリアートの階級闘争は形をかえてはいるが、共産主義革命が進展するにつれてますます激しく、ますます広範な分野で展開されてゆくのであり、プロレタリアートが完全な勝利を収めたなどとは到底いえないのである。ブルジョアが姿を消したとしても長期にわたって歴史的に形成されてきた社会的力は、政治、経済、イデオロギー、文化、習慣などに根強く残り、それらは不断に資本主義復活への傾向となつてあらわれるのである。

第三の点に關して、スターリンは、ソ連に労働者、農民、インテリゲンツィアという階級が存在することを認めてはいるが、それらは互いに敵対も衝突もしていないし、その対立は消滅しているとしている。これは全くの原則的誤りである。プロレタリアートの階級闘争の原則的見地、綱領の原則的部分の完全な放棄である。スターリンは、プロレタリアートと農民、小ブルジョアととの同盟について、その同盟の側面だけをみて、その矛盾、対立、闘争の側面をみていない。ロシアのように、人口の大部分が農民であり、プロレタリアートは農民の大海の中にうかぶ小島のようなものである状態に於て、このような評価は原則的誤りであるとともに、現実を無視した全くの幻想であり空文句である。これは事実上、プロレタリアートの立場を放棄し、小ブルジョアとブルジョアの立場に移行することであり、プロレタリアートの階級闘争に、小ブルジョアの階級協調を對置することである。

ましてや農業集團化に關しても全く失敗であつたといわねばならぬ。

スターリンは、これまでみてきたように、その理論と実践に於て、ブルジョアの影響と小ブルジョアの自然発生的な包圍と腐食作用とを體現し、党内に浸透させ、党と國家機構のなかへブルジョア分子をしのびこませ、特権官僚集團、新たなブルジョア分子を育成した。スターリン治下の諸特徴を簡単にあげれば、

③ 党の現代修正主義への転化、「レーニン記念入黨」に典型的な入黨規程の緩和によるブルジョア的分子の流入を容易にしたこと（これを反対派圧殺の手段にした）、党内闘争の官僚的手段による禁止と弾圧、分派禁止の固定化、黨機構の官僚化。

④ 官僚主文の増大。広範な大衆の國家機構への参加、生産活動と國家活動の総合ではなく分離。國家機構たるソヴェットの廃止。

⑤ コミューン原則の完全な放棄。当初やむをえない妥協としてうちだされた一部の者への高給制（ブルジョア分子の利用）、特権を縮小、廃止するのではなく、拡大、固定化し、黨、國家機關の特権官僚集團を肥大化させた。更に、秘密警察、強制收容所、血の肅清。

⑥ 労働階級軍隊としての赤軍のブルジョア軍隊化、単なる国防軍化。位階制の廃止ではなく、拡大、固定化。政治工作の輕視と武器、技術第一の唯武器論。ブルジョアの近代化。民兵制の拡大、強化でなく縮小、廃止。軍隊と生産活動の分離、俸給制の固定化。かくして、プロレタリア独裁の支柱たる赤軍はブルジョア独裁の道具に転化した。

⑦ 工業化に於ても、農村からの収奪に頼り、極端な重工業偏重（↓農村の疲弊）、消費資料生産部門（農業、輕工業）の極端な輕視、生活水準向上を犠牲にした生産力主義。労働者大衆の自覺と團結の規律ではなく、官僚的、行政的手段に重きをおき、技術機械を偏重し、政治を輕視し、ブルジョアの賃金制度を実施、拡大した。このような条件の下では、生産手段のプロレタリア独裁國家所有、集團所有も又、國家資本主義的所有、特権官僚集團に

らない。スターリンは、NEPが「小ブルジョアの自然発生的に反對するプロレタリア國家と國家資本主義との同盟」として提起された「一時的な退却」であることを理解せずに半ば絶対化し、農民の小ブルジョアの性格に拜跪し、（それに依拠して党内反對派を追い落とし）、それが富農（クラーク）を増大させ、農民の反抗を強めさせ、プロレタリア独裁の基礎を危うくするようになると、一転して行政的、官僚的手段によって、強圧的手段によって、クラークの絶滅と農業集團化を強行した。この農業集團化は、その手段からしても——貧農、下層農民に依拠し、彼らの農村ブルジョアに對する階級闘争、大衆的な、自発性と創意に依拠した闘争を發展させるのではなく、強圧的な官僚的行政的手段に頼り、したがって農民の自覺と意識とを高め、労働者階級の側へひきよめるのではなくて、農民の不信と反抗とを強め、官僚的、行政的機構だけを肥大化させる——、その内容からしても——単なる經濟單位としてのブルジョアの協同組合化であり、技術と機械優先の、したがって政治の經濟に對する從属、生産力主義であり、生産活動と政治活動、國家活動との結合ではなく分離とその固定化であつた——、そして又私的所有と商品經濟が広汎に残存し、結局のところ、農村の社會主義的改造とはなりえず、今日でも未だに克服できないほどの巨大な傷あとを残したのである。ソ連の農業の構造的停滯はここに帰因しており、それは又、形をかえた農民、小ブルジョアの反抗である。スターリン主義、現代修正主義はこの欠陥にまといつかれて、農民の商品生産と資本主義化によって農業の停滯を克服しようとしているのであるが、依然として成功してはいない。

第四の点に關していえば、スターリンはまさしくこの点に於てこそ、決定的に誤り、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変質させる主要な要因となつた。スターリン主義の發生とは現代修正主義の發生であり、その成長とソ連共產黨の制圧こそ決定的であ

要するにブルジョアの所有に変質せざるをえない。

③ レーニン主義的民族政策に代わつて、大ロシア民族主義、民族抑圧政策に轉化（グルジア侵入、ナチスとのポーランド分割、東欧諸國の從屬國化と略奪、搾取。帝國主義との世界の再分割——ヤルタ体制）。

④ 以上からして、スターリンが、プロレタリア独裁とその下での階級闘争を全的に否定したことは明白である。

五十二年論文について述べておけば、都市と農村（労働者と農民）、精神労働と肉体労働の「対立」が既に消滅したなどは全くデタラメも甚だしいことはいまでもない。「対立」と「相違」、「本質的な相違」と「そうでないもの」などの区別も又根本的に誤つたスコラ的区別である。五十二年論文は事実上の「一國共產主義論」の始まりであり、フルシチフ以降、それは一層ブルジョア的に進化、完成される。

⑤ 五十二年論文では、更に商品經濟の價值法則、資本主義の剩餘價值法則、現代資本主義（独占資本主義）の最大限度利潤の法則という現代修正主義經濟學の定式化がしあげられ、「社會主義社會」でも商品經濟と價值法則が残るといふ新発見がなされているので、この誤りについて暴露しておこう。

資本主義は商品經濟の發展によって生みだされ（資本の本源の蓄積、即ち直接的生産者の収奪、生産者と生産手段の分離を歴史的な基礎として）、商品經濟は資本主義によってはじめて全面的なものとなる。資本主義と商品經濟についてマルクスは次のように規定している。

「(1) 資本主義ははじめて商品を生ずるすべての生産物の一般的な形態にする。(2) 商品生産が必然的に資本主義的生産になるのは、労働者が生産条件の一部分であること（奴隸制、農奴制）をやめるか、または基礎が自然発生的な共同体（インド）ではなくなるときである。すなわち、労働力そのものが一般的に商品になる瞬間から

である。(3)資本主義的生産は、商品交換の基礎を、すなわち個々別々な独立な生産と、商品所持者たちの交換または等価物の交換とを、廃棄する。資本と労働力との交換は形式的なものになる。」「(「直接的生産過程の諸結果」 一五五—一五六頁)

又次のようにも述べている。「賃労働がその基礎となるとき、はじめて商品生産は自分を全社会におしつける。」「商品生産がそれ自身の内在的諸法則に従って資本主義的生産に成長してゆくにつれて、それと同じ度合いで商品生産の所有法則は資本主義的取得の諸法則に一変するのである。」「(「資本論」六一三頁)ところがスターリンは、価値法則と「剰余価値法則」なるものを恣意的に分離し、価値法則を何か等価交換の法則だと考えている。マルクスによれば、価値法則は資本主義によってはじめて全面的な法則として作用することになるのであるが、しかし又それは、商品交換の基礎を廃棄し、所有と労働の分離を法則とする資本主義的取得様式に一変させるのである。資本主義的生産は、交換なくして、しかも交換の仮象のもとで他人の労働を領有することに立脚する生産となる。だから価値法則とは、単に等価交換によって需給関係を調節し、社会的総労働を分配するだけのものではない。まさに、商品生産の所有法則を資本主義的取得様式に一変し、資本に対する賃労働の従属を不断に拡大再生産することによって、労働者階級の経済的解放、社会革命の諸条件を形成してゆくのである。だから「価値法則は一つの革命をやらんだ法則である。」「(エンゲルス)といっているのである。スターリンは、価値法則を単に等価交換の法則に解消し、その形式だけをみて内容をみることでできなかったが故に、それが資本主義以前の商品経済の法則であったかのように把え、こうして、価値法則とは別個の「剰余価値法則」なるものを資本主義の基本法則とする破目に陥いつた。それが意味するものは、スターリンの資本主義とプロレタリアートの階級闘争、社会革命に対する原則的見地の放棄に他ならない。

法則ではなく「また現代資本主義は、「平均利潤率の法則でも満足せず」、「最大限利潤の法則」が基本法則だとし、この必要が、現代資本主義を植民地の略奪と「最大限の利潤をひき出す『ビジネス』である新しい戦争をしくり、最後には、世界の経済的支配をからとろうとところみる、というような冒険的な行動にのり出させている。」「(同書四十九頁)と説明している。全くデタラメである。

価値法則が現代資本主義の基本的経済法則ではないなどというデタラメさは既にみた。最大限利潤の追求というのは、個々の資本の蓄積の衝動のことであって、現代資本主義であろうとなかろうと、資本主義の下では個々の資本はこの衝動に駆り立てられるのであり、平均利潤もそれを基礎にして形成されるのである。又、帝国主義戦争を個々の資本の利潤追求の衝動から説明するのもレーニン「帝国主義論」の俗流的改作以外の何ものでもない。これはスターリン主義の「全般的危機論」の理論的根拠となっているが、帝国主義論の経済主義的歪曲であり、超帝国主義論の一変種に他ならぬ。

#### (5)スターリン以降の現代修正主義の成長と「発展」

スターリン以降のソ連現代修正主義は、スターリン理論と社会的基礎を基本的に継承し、更に一層ブルジョア的に完成させるが、その主張を一言で要約すれば三和両全である。(平和共存・平和競争・平和移行・全人民の国家・全国民の党)

④全人民国家、全国民の党「プロレタリア独裁の消滅、社会主義の最終的勝利、二十年後の一国「共産主義社会」実現についてソ共二十二回大会新綱領(六十一年)にまとめられた現代修正主義の主張は、まず「ホルホーズ体制が経済的に繁栄すれば、ホルホーズの所有が徐々に全国民の所有に近づいて将来は単一の共産主義的所有になる条件が生まれる。」とした。(スターリン所

このように見地からは、労働力の不断の売買が仮象であり、賃労働の資本に対する隷属の形式としてのみ現われること、資本主義的生産が商品・剰余価値だけではなく資本関係そのものを再生産すること、を首尾貫いて導きだすことはできないのである。

スターリンは、このような定式から、「社会主義社会」でも商品経済と価値法則が残存し、規制することができるとしている。いうまでもなく、共産主義社会の第一段階では、商品経済も価値法則も存在しないのであり、この規定は誤りである。プロレタリア独裁期に於ては、商品経済と私的所有を直ちに廃絶することができず、とりわけ都市と農村、工業と農業の経済関係を等価物の交換によって調整することが一定期間不可避であることは事実であるが、しかし又それも永久的なものではない。問題は経済法則一般にあるのではなく、あくまで階級闘争、政治にある。ところが五十二年論文では、罵いたことに、「階級闘争」という言葉さえ一言もでてこない。ここにその経済主義の本質が如実に現われている。

スターリンのこのような観点を、宇野は「価値法則は利用できない。廃棄すべき」とし、「労働力の商品化の廃絶」を主張した。これはスターリンの誤った一面をついてはいるが、しかし又、資本家と労働者との関係を平等の商品交換関係として把え、価値法則を等価交換の法則として考えている限りに於てはスターリンの裏返しにすぎず、「労働力商品化の廃絶」「社会主義」なる小ブルジョアの人間主義に導かざるをえない。そして宇野学派も又、プロレタリア独裁下の階級闘争に、何か「経済原則」や「社会法則」なるものを適用しようという見地に立っている。これも又政治の上に経済をおこうとする経済主義の一変種に他ならない。(宇野はソ連が未だ社会主義と考えているが、当然の理論的帰結であろう。)

なお、スターリンは、「価値法則は現代資本主義の基本的経済

有理論の継承→一国共産主義論)次に「共産主義発展の第一段階である社会主義の完全な決定的勝利と全面的な共産主義建設にむかって社会が移行することを保証したプロレタリア独裁は歴史的な使命をはたし、国内の発展をはかるという課題の観点からすれば、ソ連内では必要ではなくなっている。かつてプロレタリアートの独裁国家として出現した国家は、全人民的な国家、即ち、全国民の利益と意志を表現する機関に変わったのである。」「国家を生んだ主な原因である階級対立がなくなったのに、一体なぜ国家そのものは残っているのか?それは、国家の助けをかりて始めて社会が解決できるような課題がまだ残っているから」(フルシチョフ)「搾取階級の抵抗を抑圧する機能の必要はなくなり」経済の組織と文化教育という社会主義国家の代表的機能が全面的に発展をとげ、社会主義国家は新しい局面に突入した。」「ソ連は内的条件からすれば、軍隊を必要としな」が「帝国主義陣営に源を発している戦争の危険が存続する限り、全面的な完全軍縮が達成されていない限り」「ソビエト国家の防衛力を維持しソビエト国家の軍隊を」「維持する必要がある。」「(新綱領)

スターリン理論と政治について暴論してきた我々には、これらの主張がスターリンを継承しブルジョア的に進化させたものであることは一目瞭然である。だからここでは、スターリン批判の論点をふまえて更に進化された点についてだけ指摘しておく。まず第一に、ソ連には労働者と農民、インテリゲンツィアという階級が存在しているだけでなく、搾取階級も絶滅していないばかりか、新たなブルジョア分子やブルジョアの特権官僚集団が存在し、階級斗争が継続しており、プロレタリア独裁はブルジョア独裁に変質し、国家機構はブルジョア分子の支配の道具に転化していること。したがってソ連は一国で社会主義社会になったこともなければ、階級・階級闘争も消滅してないし、ましてや二十年後に共産主義社会に移行するなどとは全くのウソッパチである。これ

らは全てブルジョア独裁、資本主義の復活をおおいかくす口実である。

第二に、私的所有、階級、階級闘争が死滅すれば国家も死滅する。ソ連に国家と軍隊が、住民から遊離した社会の寄生体、特殊な抑圧機構（帝国主義国家よりも一層警察的、官僚的に整備された機構）として存在しているのは、新たなブルジョア階級、搾取者、走資実権派、特権官僚集団の利益を擁護し、ブルジョア独裁を擁護し、プロレタリアート、勤労大衆を抑圧し、隷属させるためであり、まさしくその巨大な機構は、階級対立の非和解性の激化に照応している。全人民国家とはブルジョア国家であり、ブルジョア独裁の別称である。「ソ連に於て社会主義が勝利し、ソビエト社会の統一が強化された結果、労働者階級の共産党は、ソビエト国民の前衛隊となり全国民の党となった。」（新綱領）全国民の党！まさにその通り。ソ連共産党は労働者階級の前衛隊ではなく、ソ連国民のソ連ブルジョアジーの党である。ブルジョア独裁を指導するためのブルジョア政党である。「社会主義の条件のもとでは、経済の方が政治よりも重要である。」（六十二年「エコノミー・エスカ・ガゼータ」社説）こうしてこの原則の下に、工業党と農業党へと党が分割される。

#### ② 平和共存、平和競争、平和移行論

まず唯武器論の立場から、核兵器の破壊力が世界政治の全てを決定すること、それ故、核戦争を避けること＝平和共存が「現代の絶対的至上命令」とされる。（「世界は核兵器のまわりをまわっている」そうだ。）この平和共存を維持するためには、国際階級闘争のあらゆる現われを抑圧し、米ソの階級協調、結託と争奪の道具に利用する。平和共存の下で、資本主義と「社会主義」が平和競争を行い、必然的に「社会主義」が優位に立つので、世界資本主義の基礎は自然に洗い流され自動的に消滅していく。これとともに、又、これによって資本主義から社会主義へと平和的に

「移行」することが可能になり、資本主義国では議会主義、構造改良、平和革命が正しい路線となる。このような「三和」路線は、スターリンの直接延長上にはないが、しかしスターリンの世界プロレタリア共産主義革命への敵対、民族共産主義、二段階戦略の基礎の上に成長し、より一層のブルジョアの進化をとげたものに他ならない。

③ フルンチーフ以降、賃金制度に更に物質的刺激的の原則が強化され、利潤率が導入され、企業管理職の権限強化と報奨金が拡大され、党・国家官僚・テクノクラート・ブルジョア分子の特権化が飛躍的に進み、労働者の賃金奴隷化が深まっている。（七十年で六六三万人が首切り、一〇〇〇万人が高賃金を求めて移動している。）

#### ④ 現代修正主義の社会帝国主義への転化

ソ連現代修正主義の社会帝国主義への転化は、ブレジネフ・ドクトリンによって完成した。ブレジネフ・ドクトリンは第一に、有限主権論、「ソ連圏」即ち、東欧諸国を属国化させ、植民地と化した。「ソ連帝国」の利益を守ることが（東欧諸国の）国家主権よりも優先すること。第二に、国際独裁論＝世界プロレタリア共産主義革命の不可欠の条件である世界プロレタリア独裁を、ソ連社会の独裁の口実にする。第三に、社会主義大家庭論＝ソ連の永遠の支配の合理化。第四に、国際分業論＝ソ連は工業、A、L、A、東欧諸国は農業あるいは軽工業として植民地的経済構造を固定化し、食料の略奪、搾取とソ連の資本、商品投下市場に転化し、民族経済を押しつぶし永遠にソ連社会の鎖につなぎとめること。第五に、利益関係論＝ソ連艦隊は「わが国の利益に」とって関係のある全てのところを航行する」という砲艦外交、覇権主義である。ソ連社会帝国主義は、第三世界の諸国へ、プロレタリアート人民、被抑圧民族の帝国主義に対する闘争を利用し、助

けるふりをして、軍事・経済援助・借款・供与etcを道具にして、資本輸出を行い、第三世界の諸国を債務奴隷にくだづけにし、原料・資源を収奪し、帝国主義と世界支配のための覇を争い、争奪戦を展開している。即ち、ソ連社会帝国主義は、「販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、弱少民族に対する支配権のため」（ボ綱領及び我々の綱領）に帝国主義と争奪を行っている。ソ連社会帝国主義が帝国主義強盗と異なるのは、ただ社会主義の仮面をかぶって国際プロレタリアートと人民の革命運動を利用し、助けるふりをした強盗だというだけである。ソ連社会帝国主義は、一方では帝国主義と結託して世界プロレタリア共産主義革命の前進に敵対し、国際プロレタリアート人民の斗争を抑圧し、他方では国際プロレタリアート人民の闘争を利用して世界支配のための争奪を帝国主義で行っている。ソ連現代修正主義の社会帝国主義への転化と成長、帝国主義との結託と争奪は、世界プロレタリア共産主義革命の前進を阻むことはできないばかりか、世界の諸矛盾を激化させ、帝国主義と社会帝国主義の危機を激化させ、彼等の墓掘人である国際プロレタリアートと勤労被搾取大衆、被抑圧民族の反抗と攻撃を強めさせ、この共通の敵との闘いに結束させ、訓練してゆかざるを得ない。

なお、ソ連社会帝国主義は、フルンチーフによって突如として登場したものでもなければ、フルンチーフによって登場したものでもない。それは、既にスターリン時代において現代修正主義への転化、プロレタリア独裁のブルジョア独裁への転化、国家資本主義を基礎として発生したものであり、ナチスとのポーランド分割やモンゴルの従属国化として現われ、第二次大戦を「大祖国防衛戦争」として闘うなかで本格的に成長し、東欧諸国の略奪と従属化、バルタ体制による世界の分割体制、米帝との結託と争奪、冷戦＝平和共存体制として発展してきたものである。

#### (7) トロツキー、第四インターの誤りについて

—— 急進民主主義、左翼民主主義、調停主義、戦術左翼主義最後に、スターリンに対する「左翼反対派」として斗い、第四インターとして継承されたトロツキーとトロツキズムに対する評価を行っておこう。

① 原則的部分について——トロツキーは資本主義批判と綱領の原則的部分に対する体系的な著作を著わしてはいないが、ここでは「マルクス経済学序説」（トロツキー、補完三）に於ける彼の見解を検討することによってそれにかえたい。

彼は「様々な経済部門の相関的な均衡が、どのように創出されるのか」ということから価値法則を説きおこし、価値法則を商品交換の法則として一面的に把握し、資本家と労働者との関係も等価交換の法則に支配されていると考えている。その上で、資本家と労働者の不平等は資本家が労働力の価値をこえた価値＝剰余価値を搾取することにあるとし、労働力の社会的自然属性から（つまり、労働力が価値以上の価値を生みだすから）剰余価値の搾取＝不平等を説明している。このような説明は、資本論を古典経済学の水準にまでひきもどすことに他ならない。ミルでさえ「利潤の原因は労働が、労働の維持に必要であるよりも多くを生産するということである。」（D・K五三九）と説明している。だが資本と賃労働との「交換」は仮象であり、賃労働の資本への隷属を媒介し、永久化するための形式としてのみ現われる。なぜなら、「第一に労働力と交換される資本部分そのものが、等価なしで取得された他人の労働生産物の一部分にほかならないからであり、第二には、この資本部分はその生産者である労働者によってただ補填されるだけでなく、新しい剰余を併って補填されねばならぬからである。」（D・K六〇九）だから剰余価値の生産は、労働力の社会的自然属性（この言葉自体が、資本関係の下でのみあ



たかも自然属性であるかの如く現われることを意味している。からではなく、資本関係そのもの（対象化された労働の生きている労働に対する支配、労働者階級の資本家階級への経済的隷属）から説明されなければならない。奴隷も農奴も、生産力が発展していれば生活の維持のために必要な生活資料以上の生産物を生産する（剰余生産物）ことができるが、しかし、この剰余生産物は剰余価値でもなければ、資本へも転化しない。剰余価値が生産され、それが資本に転化するのには、資本関係を前提にしているのだから、この実存条件からの剰余価値の生産も説明しうるのである。トロツキーはこうして、この資本関係から生ずる結果を原因ととりかかっているのである。このような見解は、先にみたように第二インター流の理解であり、スターリンと同根のものでしかない。このような見解からは、ブルジョアジーとプロレタリアートの経済的利害が非和解的に対立し、それがプロレタリアートの社会革命に導かざるをえないことを首尾一貫して明らかにすることはできないのである。

それだけではない。トロツキーはここから更に、「生産力の発展」と「価値法則との矛盾」を説き、「資本主義の発展が不可避的に陥らざるをえない破局」をプロレタリアートは「生産手段の社会化」によって救うとしている。これは又、何というプロレタリアートの社会革命の歪曲であるのか。（スターリンの「生産形態」↓「所有形態」と大したかわりはない。）又、「資本主義の発展が民族国家をのりこえていく」というふうに、民族国家と生産力の矛盾から資本主義の危機や帝国主義戦争・革命を説明し、しかも「以前には歴史の進歩的要素であった国家を」生産力発展に与っての「耐えがたい抑制物に変えてしまった」とする。確かに生産力は生産関係と矛盾しているが、生産関係とは経済的の下部構造であり資本・賃労働関係のことである。

トロツキーはあたかも生産力が政治的の上部構造であるブルジョ

ア民族国家と衝突しているかのよう描きだし、生産関係を民族国家として把握してしまっている。それだけでなく、国家をこの資本・賃労働の階級対立の非和解性の産物としてではなく、超階級的な機構として把握し、国家に対する民主主義的見地に陥っているのだから。スターリンも又、国家に対するさかだちした観点によって、二段階論、ブルジョア民主主義政治を導きだしたのであるが、トロツキーのこのような見解はスターリンを批判しえる水準のものではなく、このような見解は過渡的綱領として体现されることになる。トロツキーは、最大限綱領と最小限綱領を過渡的綱領によって大衆が日常闘争の過程で「橋を見つめるのを助ける」としているが、このような見解はマルクス主義の階級闘争の原則的見地から逸脱する左翼社民の見地、急進民主主義に他ならない。

トロツキーのスターリン「一国社会主義論批判」も又、生産力主義や戦術左翼主義的見地から主張されているのであって、マルクス主義のプロレタリアートの階級闘争の原則から批判とはなっていない。プロレタリア独裁下に於ける官僚的、行政的手段への過渡の依存、党の指導性の軽視、赤軍近代化、工業化計画、労働の軍隊化論争 etc. ではスターリンと大差はない。

#### ③組織に対する民主主義的見地

このような原則的誤りからして、政治に於て共産主義を民主主義に低めた結果、組織に於ても共産主義を民主主義に低めてしまっている。「階級闘争の一致団結」の原則なるものをもちだし、ボルシェヴィキとメンシェヴィキの分派闘争の内容を無視して、それを党組織運営の原則とし、調停主義に陥ったのである。スターリンとの党内闘争に於ても、中央集権主義に労働者民主主義、党内民主主義を対置し、自己の最大の拠点である赤軍を党内闘争に動員できず（中立化して）、かくして敗北は不可避であった。

#### ④戦術上の誤り

ている。初めに第一の内容から検討する。

#### ①マルクス・レーニン、「永続革命」論の継承としての連続革命論

△ミンテルン二回大会で、レーニンは、あらゆる植民地、後進国で共産党を結成し、農民ソヴェトを組織し、更に国際プロレタリアートの援助を得て、これらの諸国でも「資本主義的発展を」とびこえて、一定の発展段階を経て、共産主義へ移ることができると指摘した。中国革命は、レーニンの指摘が正しかった事を実証しただけでなく、創造的に発展させたものである事を示している。それ故、中国革命の成功は、ベトナム・朝鮮・キューバ等、と続く民族解放社会主義の闘争を大きく発展させ、第三世界の解放闘争の発展を切り開いた。中国革命は、多くの重大な敗北を蒙りつつも、プロレタリアートの前衛である中国共産党の指導と赤軍と革命戦争を堅持し、農村解放区、プロレタリアートと農民の同盟を基礎とした土地革命、民族統一戦線を武器にしてその勝利を切り開いた。この過程は、スターリン、コミンテルンの二段階革命論とブルジョア民主主義革命の枠内への封殺、民族ブルジョアジー、国民党への屈服、投降路線等を、はねかえし、その核心に於いて、マルクス・レーニンの「永続革命」論を復権し、継承するものであった。

②中国全国人民代表大会の成功、新憲法の成立を祝う  
——中国共産党に対する我々の態度  
今年一月十九日、中国は全国人民代表大会の成功と、新憲法の成立を発表した。我々は偉大な同志である中国共産党のこの前進を国際共産主義運動とプロレタリア独裁の歴史的な前進と受けとめ、心から祝うものである。この項に於いては、我々は、既に述べられてきた見解の上に立って、中共に対する我々の態度を明らかにする。

中共、毛沢東思想の基本的観点は、連続革命論として一括できよう。連続革命論は、基本的に二つの内容から、即ち第一には、新民主主義革命から社会主義革命への連続的発展であり、第二には、プロレタリア独裁下での社会主義革命の連続の理論から成る。





けでは十分でなく、政治戦線、思想戦線に於ける徹底した社会主義革命が必要である。社会主義社会の段階で一貫してプロレタリア独裁を堅持し、資本主義の復活を防ぎ、共産主義の移行の条件を整えなければならない。

③労働者階級が指導し、労働同盟を基礎としたプロレタリア独裁によって、反動階級、反動派、社会主義的改造と社会主義建設に反対する連中に対する独裁を行い、人民内部では、民主集中制を実行する。

④大衆路線の堅持。

⑤社会主義革命、社会主義建設に於ける階級的基礎、プロレタリアートと貧農、下層中農の同盟。

⑥都市、農村に於ける社会主義教育運動、社会主義的改造をくり返し行い必要。

⑦プロレタリア独裁の基本任務のひとつとしての社会主義経済の発展、農業を基礎とし工業を導き手とする。工業、農業、科学技術、国防の現代化、生産の発展を基礎とした人民大衆の生活の改善。

⑧社会主義経済の二形態としての全人民的所有制と集団的所有制、後者から前者への移行には相当長い発展過程が必要、集団的所有制にも低い段階から高い段階へ、小規模から大規模へと発展する過程があり、人民公社はこの移行の問題を解決する適切な組織形態。

⑨百花齊放、百花争鳴は、芸術、文化、科学の発展を促す方針。政治への奉仕。政治と生産労働の結合。階級闘争、生産闘争、科学実験、文化革命。

⑩幹部が集団的な生産労働に参加する制度の堅持によって官僚主義、修正主義、教条主義を防止する。

⑪少数のものへの高給制度を絶体を実施しないこと。個人所得の格差は拡大せず縮小すること、職権を利用した特権享援の防止。

『もはや互いに敵対する階級は存在せず』『階級衝突は存在しない』と宣言し、社会主義社会内部の統一性を一面的に強調して、その矛盾を軽視した。スターリンは、労働者階級の広範な大衆に依拠して資本主義勢力に反対する闘争をおこなうのではなく、資本主義復活の可能性の問題をただ国際帝国主義の武力攻撃とつながりのある問題にすぎないとみなしていた。これは理論的にも実践的にも正しくないものである。(頁三一五—三一六)この様な批判は、スターリン一国社会主義論の根本的誤りをつくものであり、⑥で見た様に、中共はプロレタリア独裁期の階級闘争に対して、スターリンの見地ではなく、マルクス、レーニン主義の原則に立っていることを示している。だがこの後に続けて「だが、それにもかかわらず、スターリンは、やはり偉大なマルクス、レーニン主義者であった。かれは、ソ連の党と国家を指導していたあいだ、プロレタリア独裁と社会主義の方向を堅持し、マルクス、レーニン主義の路線を実行し、ソ連が社会主義の道に沿って勝利のうちに前進できるように保障したのであった。」(頁三—六)とスターリンを擁護しているのであるが、この様な評価は、我々が既に見た様に誤ったものと言わざるを得ない。この様なスターリン評価の結果、中共は、フルシチョフがスターリン死後「ソ連の党と国家の大権をのっとった。これはプロレタリア階級独裁をブルジョア階級独裁に変える反革命クーデターであり、社会主義をくつがえし、資本主義を復活させる反革命のクーデターであった。」(「レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか?」上場所収頁二十九)というふうに扱っている。即ち、フルシチョフが登場して、ソ連が社会主義から資本主義に、プロレタリア独裁が、ブルジョア独裁に転化したかのように。だが我々が見た限りでは、スターリンが現代修正主義の路線を実行したことによって、上部構造が変質し、下部構造も又、ブルジョア分子の支配に転化したのである。フルシチョフは、スターリンの理論を基本的

⑫人民の軍隊の党による指導と人民大衆の監督、軍民一致、將兵一致、三大民主の実行(軍事、政治、経済)民兵の組織、全民皆兵。

⑬人民公社機関の党による指導と人民大衆の監督、人民大衆への依拠と専門機関と結びつけること。反共革命の粛清。

⑭對外政策、プロレタリア国際主義の堅持、大国排外主義、民族的利己主義に反対、全世界の被抑圧階級と被抑圧民族の革命闘争の援助、社会主義諸国間の自主独立、完全平等、プロレタリア国際主義の相互支持、援助の原則、自力更生の原則。

⑮共産党の指導的役割、修正主義反対、後継者の育成、民主集中制、個人独裁の防止、自己批判、大衆路線、(頁三六二—三七〇)

今日ではこれらは奪権闘争、政治大革命としこの文化大革命の経緯によって一層豊富化されている。(修正主義、官僚主義を防ぐのに免官という行政的手段ではなく、大衆を動員し、教育する闘争としてうちだされたこと、地方権力機関としての三結合による革命委員会、権兵簡政、国家主席の廃止による党の指導の一元化、工業の地方分散と農業との結合、「戦争と災害に備え人民のために」を基本とした経済建設、深く豪を掘り、民兵を拡大すること、武器、技術よりも人の要素、政治の要素の重視、民主集中制の実行に於ける大字報、或いはスト権の承認、「何回でも文革をやる」という見地、国際面に於いて、「中国は世界革命の勝利まで闘う」「最大の民族的犠牲をおしまない」、反覇権闘争、「絶体に超大国にならない」、社帝に対する闘争)

⑯中国共産党の社会主義社会「プロレタリア独裁論とスターリン「一国社会主義論」

中共は、スターリンの一国社会主義論をどのように評価しているのか?「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」では、次の様にスターリンを批判している。「ソ連で農業集団化が基本的になしとげられたあと、スターリンは早くて、ソ連には

には継承し、更に一層ブルジョア的に進化させたのである。ソ連現代修正主義、社会帝国主義を断固として批判するには、その源流であるスターリンを根本的に批判しなければならない。中共はスターリン「一国社会主義論」をその核心に於いてではないが、依然として枠組みに関しては継承している。社会主義的所有、社会主義社会に於ける商品生産と「価値法則」の存在、そして一国に於ける「社会主義社会」建設と「社会主義革命」プロレタリア独裁。だから我々も、基本点、積極的側面を踏えたいので、その否定的側面、限界についてみておかねばならない。

中共は、過渡期「プロレタリア独裁期と共産主義社会(第一段階も含む)」とをまづもって区別するのではなく、この区別をあいまいにし、高度の共産主義社会とそれ以前との段階とを区別している。「マルクスとレーニンが述べているプロレタリア独裁の国家が存在する歴史的時期とは、けっしてフルシチョフ修正主義集団がいつているように、資本主義から共産主義の第一段階への移行の時期だけをさしているのではなく、資本主義から『完全な共産主義』へ移行する時期、すべての階級差異の廃絶と『無階級社会』の実現へと移行する時期、つまり共産主義の高い段階へ移行する時期をさしていることは非常に明白である。」(頁三三—三五)これは明らかに我々が既に明らかにしたように「ゴダ綱領批判」を歪曲している。マルクスは、資本主義社会から共産主義社会への革命的転化の時期がプロレタリアートの革命的独裁だとしているのである。過渡期に於けるプロレタリア独裁と「共産主義社会の将来の国家組織」(頁五六)とを明確に区別している。レーニンも又、「国家と革命」の中で、「第五章・国家死滅の経済的基礎に於いて、2. 資本主義から共産主義への移行、3. 共産主義社会の第一段階、4. 共産主義社会の高い段階」とを分けて説明しており、「3. 共産主義社会の第一段階」(すなわち社会主義社会)に於いて、「資本家はもはやいない。階級はもはやなく、したがって又どの階級を抑圧することもでき

ないという限りでは、国家は死滅する。しかし国家はまだ完全に死滅したのではない。なぜなら、事実上の不平等等を是認する「ブルジョア的権利」が依然として保護されているからである。国家が完全に死滅するためには、完全な共産主義が必要である。」

(頁一三三) 現在の「一国的なプロレタリア独裁」と、「共産主義社会の将来の国家組織」とを混同することは理論的には誤りであり、実践的には有害である。確かに「社会主義社会に於けるプロレタリア独裁と階級闘争の継続」という主張は、ソ連現代修正主義、社会帝国主義のプロレタリア独裁の放棄、ブルジョア独裁への変質、プロレタリア独裁と階級闘争消滅論、「一国共産主義論」に対して、プロレタリアートの階級闘争とプロレタリア独裁を擁護している限りに於いては積極的な意義をもっており又、この積極的意義こそ主要な要素だということには既に指摘した通りである。しかし、この「社会主義プロレタリア独裁」が「共産主義社会の将来の国家組織」と今日のプロレタリア独裁とを混同している理論的誤りは、単に言葉の上だけの問題ではなく、(中共のいう、社会主義社会プロレタリア独裁期を過渡期プロレタリア独裁期といいかえれば、そのまま通用するというような論議は誤り) 実際上に様々な点での歪みを与えずにはおかない。

それは、世界プロレタリア共産主義革命の不可欠の条件である世界プロレタリア独裁への消極性、原則的否定として現われる。一九七〇年「レーニン主義なのか、それとも社会帝国主義なのか?」(人民日報「紅旗」解放軍報「編集部」)に於けるソ連社会帝国主義批判のなかで、社帝が「国際独裁論」「社会主義家庭論」を、レーニンの「プロレタリア階級独裁を一国的な(すなわち一国に存在して世界政治を規定することのできない)ものから、国際的なもの(すなわち世界政治全体に決定的影響をおよぼすことができる。少なくともいくつかの先進国のプロレタリア

階級の独裁)(転化させる)」「民族問題と植民地問題についてのテーゼ(原案)」という主張を利用して社帝の他国への支配の合理化、口実としているのを批判し、「レーニンのいう本来の意味は、プロレタリア国際主義を堅持し、プロレタリア世界革命を宣伝することである。」(頁四〇)というふうに解釈している。そして「平等、領土保全、主権と独立の尊重、相互内政不干渉という原則」

「プロレタリア国際主義の相互支持、相互援助」を対置している。確かに、社帝の「国際独裁論」「社会主義家庭論」は、社会主義の仮面をかぶった帝国主義強盗の理論である。しかし、そのことと、世界プロレタリア独裁を原則的に否定することは全く別の事柄である。世界プロレタリア独裁は、世界プロレタリア共産主義革命の不可欠の条件であり、国際プロレタリアートの当面する政治的任務であり、単に世界革命の宣伝や内政不干渉に解消するわけにはゆかない。ましてや、内政不干渉をプロレタリアートの原則とするわけにはゆかない。プロレタリアートと党が民族自決権を承認するのは、プロレタリアートの自決(社会革命)を促進するためであり、真に自主的で恒久的な、諸民族の融合をもちとるために不可欠だからである。だから、それは絶対的な原則なのではなく、プロレタリアートの階級闘争、社会革命の利益に従属したものであり、プロレタリアートと党は、被抑圧民族の民族自決を支持するとともに、国際プロレタリアートの緊密な融合をもちとるために断固として闘うであろう。中共の世界プロレタリア独裁への原則的「消極性」は又、国際階級闘争を民族的観点(民族的矛盾)でおきかえようとする傾向と結びついている。(帝国主義の時代に於いて、「民族問題が存在しない」「民族自決権ナンセンス」というような主張が、帝国主義的経済主義であり、帝国主義が被抑圧民族への圧迫と支配、略奪を激化させ、被抑圧民族の革命運動を激化させることを全く理解しないものである)といふまでもなく中共が日本革命に対して、一貫して反米愛国路線、民族民主革

(六七頁下段へ続く)

#### IV 日本プロレタリアートの当面する政治的任務

一、綱領の前述部分は、資本主義に対するマルクス主義の革命的批判を原則的に提起し、資本主義がその発展の内的必然性によって共産主義に取ってかわられざるをえないこと、事実、今日、取ってかわられつつあることを確認している。それは、歴史的な客観的な法則であり、これをおし止めることは誰にもできない。この転化は、従って、資本主義が高度の発展を遂げているわが国に於て不可避である。日本プロレタリアートは、自らの手で、これを果さねばならない。

日本プロレタリアートの当面する政治的任務を提起するに当たって、我々は次の二つの傾向と闘い、これとさっぱり手を切らねばならない。

一つは、日本プロレタリアートの当面する政治的任務を、独自に提起することを曖昧にし、軽視し、更には、この問題そのものを忘れ去る傾向であり、他の一つは、マルクス主義の見地から首尾一貫して提起するのではなく、非科学的な独断、定型への当てはめでお茶を濁す傾向である。

前者は、分散し、混乱の度を一層深め、階級闘争全体を分析するのではなく、自らの狭い経験、判断から出発し、思想、組織、戦術問題の一切を、自らの個別利害に従属させてゆく、サークル、共産主義者の小分派に深く浸透している。後者は、政治的傾向に拘りなく、日本共産党以来のわが国の共産主義運動全体を蔽ってきた。とりわけ、革命左翼は、わが国の階級闘争の具体的現実を鋭く目を向けるのではなく、自らの主観からする単純な命題を階級闘争の現実におしつけてきた。即ち、国家権力をテコとしてなされるわが国の階級支配の具体的構造を暴き出しえなかった。

かかる傾向と意識的に闘うことなしに、日本プロレタリアートの当面する政治的任務を正しく提起することはできない。だから、

かかる傾向を克服し、当面する政治的任務を正しく導き出すために綱領はこの項の最初で、その態度、方法について述べている。

「世界プロレタリア共産主義革命の時代にあつて、国際プロレタリアートの共通の終局目標への途上で、さまざまな国の共産主義者がかかざる当面の任務は、その発展段階がどこでも同一ではないため、また、それぞれの国が異なる社会的・政治的環境のなかにあるため、それぞれ異なったものとならざるをえない。」

即ち、綱領では、「発展段階」と「社会的・政治的環境」の分析を当面する政治的任務の基礎においている。この分析に進もう。

二、第二次世界大戦は、帝国主義列強間の市場、権益、領土、植民地再分割のための強盗戦争を基軸にすると同時に、植民地、半植民地被抑圧民族の解放戦争であり、その先進部分の社会主義革命戦争への発展であり、更に反ファシズムの闘い等、これら総体であった。

この世界大戦は、日、独、伊の敗北、連合国側(英、米、仏、ソ等の勝利)に帰じ、民族解放、社会主義革命の前進を果した。大戦は帝国主義諸国を疲弊させ、ヨーロッパとアジアの多くの国々で、革命の客観的条件をもたらした。資本主義の没落に拍車をかけるものとなった。このような情況のなかで、民族解放の闘い、全世界での搾取者に対するプロレタリアートを先頭とする労働大衆の闘いは飛躍的に発展した。

一九四九年中国革命の成功をはじめとし、多くの植民地、半植民地において、政治的自決が闘いとられ、更に幾つかの諸国において社会主義革命が勝利した。

このように、プロレタリアート独裁が数ヶ国において闘いとられたこと、植民地、半植民地被抑圧民族の多くが政治的自決を果し、民族解放戦争の前進をとげたことは、帝国主義者、搾取者の反抗を強めることとなった。

「帝国主義は、プロレタリアート独裁国家を武力で包囲し、「封じ込め」、経済的に疲弊させ、孤立させ、全ての国々での労働者階級、勤労大衆の闘いを直接に鎮圧し、全世界の人民を系統的に搾取し、収奪するための新たな国際反革命体制（国際連合、IMF、NATO、安保等諸軍事同盟によってなっている）を組織した。この体制は、第一次世界大戦以降、諸列強のなかで、最も経済力を振い、第二次大戦のなかで強大化したアメリカ帝国主義が、自らを中核とし、組織した。」

こうした情勢のなかで、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の対立、抑圧民族と被抑圧民族との対立の激化は避けられない。

アメリカ帝国主義を中心とした諸列強は、自らの競争相手を解体し、支配するために、とりわけ、社会主義革命の国際的波及を抑え、革命闘争を鎮圧するために、敗戦国（独、日等）を直接占領した。

日本を、事実上単独で占領したアメリカ帝国主義は、日本軍国主義の軍備、その経済基盤を解体し、プロレタリアート、被搾取勤労大衆の闘いを直接鎮圧し、懐柔し、彼らの意に沿った新たなブルジョア支配体制への転換を計った。所謂「民主化」政策（農地改革、財閥解体、幾つかの民主的権利の擁護等）は、労働者階級、人民の民主的権利のための闘いに対する一定の譲歩ではあったが、専らかかる支配体制の転換を促進するものであった。

このようにして、議会制民主主義への転換がなされたが、それは搾取者の独裁を、即ち、一握りの人々による専制支配を、プロレタリアート、人民の目から隠し隠す代物ではない。一九四六年公布された新憲法は、転換したブルジョア支配体制の総括であった。

日本政府は、大ブルジョアジー、大地主の旧来の諸権益を防衛すべく努めたが、多大の譲歩を余儀なくされ、アメリカ帝国主義

再建は、五四年自衛隊への再編、防衛庁の新設によって本格化され、警察制度は、自治体警察を事実上解体して、国家警察に再編されると同時に、政治弾圧機構が強化された。

プロレタリアート、人民への弾圧機関の連絡、統一整備がなされ、弾圧立法、刑事特別法、破防法、公安条例等）が、矢つぎ早やに生み出され、適用された。

教育に対する法律、政策による国家統制が強まり、帝国主義的労働運動の育成が計られ、賠償をテコとした資本の輸出が再開された。

これらの諸情況に対応し、更に搾取者の政治的独裁を一層確固とするために、わが国の支配階級を代表する自由党及び民主党は、一九五五年合同した。こうした中で、復興し、力を強めたブルジョアジーと権力を集中した高級官僚の相互接近、癒着も急速に進行了た。

この中央集権的な国家機構は、アメリカ帝国主義に依然多大に依存しながらも、その対日支配の範囲を徐々に狭め、五〇年代後半において、日本における政治権力支配の主導権を基本的に握った。

この国家機構は、プロレタリアートの解放闘争の一切のあらわれを、暴力によって、また買収によって、また労働者階級を分断することによって、その他ありとあらゆる手段によって、休みなく、組織的に弾圧してきている。それは今日わが国においてプロレタリアートの最大の敵対手となっている。

ベトナム革命戦争、中国文化大革命の勝利を中心とした国際共産主義運動の発展、第三世界解放闘争の進展は、今日全世界のプロレタリアートを先頭とした人民の攻撃を一層強力なものとし、帝国主義、社会帝国主義の侵略、反革命を至る所で行き詰まらせ、打ち砕いている。

帝国主義諸国においては、インフレーションの進行、失業の増

によって庇護されると同時に、完全にその統制下におかれた。

「全世界において、プロレタリアート、人民の闘いが飛躍的に強まったこと、中国革命が勝利し、その他幾つかの諸国でプロレタリアート独裁が樹立されたことに対抗し、アメリカ帝国主義は日本をいち早く「極東における反共の防壁」「アジアの軍需工場」とすべく、金融資本の延命、復興、再軍備を主導し、これに多大の援助を行った。」

日本帝国主義の長期に渡る侵略戦争による疲弊と敗戦による旧秩序の瓦解、プロレタリアート、人民のさまざまな困窮の増大は「全国民的危機」、つまり、社会革命の客観的条件をつくり出した。労働者階級、人民の不満は爆発し、反抗が激化し、民主主義的権利を獲得するための闘いがもたらがった。しかし、この闘いは、日本共産党の日和見主義的方针によって、政治権力の奪取、プロレタリアート独裁の樹立にまで一貫して組織されず、かえってそれによって鎮静化された。

朝鮮侵略戦争の特需を通じて金融寡頭制を基本的に復活させた日本資本主義は、一九五一年サンフランシスコ「平和」条約及び日米「安全保障」条約を締結し、形式的に独立した。これはアメリカ帝国主義の世界支配戦略の一端を日本が担うことを約したものであり、「世界の憲兵」たるアメリカ軍の駐留状態、基地設定を何ら変えるものではなく、沖縄、小笠原諸島を無期限、無条件に米軍政の支配下におくものであり、占領時におけるアメリカ帝国主義の日本政府支配を直ちに根本から覆すものではなかった。それは完全占領状態のいわば「半占領、半独立」状態への転換にすぎなかった。

一九五〇年代を通じて、日本資本主義は、今日における巨大な官僚軍、常備軍、警察、監獄等々よりなる中央集権的な国家機構の基本骨格を形成した。

一九五〇年、警察予備隊の発足から開始された帝国主義軍隊の

大、生活環境の悪化、搾取と収奪の強化によって、プロレタリアート、人民の不満は増大し、その反抗が強まっている。

また、列強間の発展の不均等性によって、相互の経済的な政治的矛盾、対立が増大した。すべてこうしたことのために国際反革命体制は、動揺し、矛盾を激化させている。

これらのことは、帝国主義の一時的な相対的安定期が終わりを付けていることを示し、帝国主義の没落と共産主義の勝利が不可避であることを一層明らかにしている。世界プロレタリア共産主義革命の一大飛躍の時が近づいている。

世界プロレタリア共産主義革命の前進、勝利のためには、全世界における労働者階級のあいだの完全な信頼と、もっとも緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命的行動のできるだけ大きな統一とが必要である。これらの条件は、ソ連共産党を筆頭とし、公認の共産党の多くで主導権をにぎったマルクス主義の根本的修正、歪曲と断固として仮借なく闘わなければ実現することはできない。

一九五〇年代後半より重化学工業における新技術による設備投資を中心になされた資本の強蓄積によって、工業生産は著しく増大し、金融寡頭制は再編、強化された。この「高度経済成長」のなかで、日本帝国主義は、資本の輸出を急激におし進め、原料資源獲得のための、販売市場拡大のための、より低廉な労働力の支配のため、多かれ少なかれ他国の支配のための侵略にのり出した。同時に国家機構は、飛躍的に肥大化し、重武装した。即ち、自衛隊の近代化、拡充が計られ、軍需生産は増大し、経済の国家統制が拡大し、その他種々の領域への国家の介入、国家によるプロレタリアート、人民への統制、監視が強められた。今うしたこと

は、日本帝国主義が、世界有数の列強の一つに復活していることをはっきりと示している。

しかしながら、この中央集権的なブルジョア独裁国家は、依然アメリカ帝国主義に、政治的に、軍事的に、かつ経済的に多大に



依存している。今日、依然数千万の米軍がわが国に駐留しているが、それは、プロレタリアート独裁国家を直接威嚇しており、かつ東南アジアでの民族解放―社会主義革命闘争を直接鎮圧するために出動しており、日本プロレタリアート、人民の革命闘争鎮圧のために控えている。わが国のブルジョア独裁国家は、アメリカ帝国主義の主導の下に、国際反革命戦略の一環を担い、かつ米軍の力によって、わが国における階級支配を補完している。

一方、資本の強蓄積は、工業においても農業においても、小規模生産を駆逐し、その独占体への一層の隷従を強制し、彼らの極めて多くをプロレタリアに転化した。独占資本は、超過利潤の僅かのおこぼれで、プロレタリアート上層の前にも増して多くを買収し、彼らに公然と階級的利益を裏切らせると共に、プロレタリア、半プロレタリアの圧倒的多数をなし強蓄積のテコとなつた下層大衆を、一層不安定で低劣な状態におし止めている。即ち、「経済の高度成長」のなかで、労働の生産性が著しく増大したにも拘らず、労働の密度が増し、搾取が強化され、収奪が強まり、生活の不確かさと種々の困窮が増大し、インフレーションの急速な進行によって困窮は加速化され、生活環境が悪化し、政府及び搾取者による管理、統制、種々の差別、分断支配、排外主義の攻撃が強まっている。

このようにして、「経済の高度成長」、資本の強蓄積を通じて、わが国において「資本の専制支配」が完成した。しかしながら、この過程は、同時に、プロレタリアの教と結束を増大させ、労働者階級を先頭とする被搾取労働大衆の反抗を激化させ、生産手段の集中及び集積を途方もなく進行させ、労働の社会化を促進した。

すべてこうしたことからわが国では「全国民的危機」がまさに生み出されようとしており、社会革命が避けられないものとなっている。つまり、日共現代修正主義派は、労働者階級の革命的暴力によってブルジョア独裁権力を打倒し、その国家を解体し、プロレタリアートの独裁を打ち立てるのではなく、議会において多数派を形成し、ブルジョア独裁国家を利用することによって、平和的に革命が遂行される如きマルクス主義の国家学説を投げ捨てた、また、歴史上みじめに破綻し続けてきた幻想を、広汎にふりまいて

いる。彼らは、資本主義及び帝国主義が不可避に生み出す労働者階級、人民に対するさまざまな差別、分断と断固として闘うのではなく、資本主義の基盤の上で、ブルジョア民主主義によって、差別、分断の解消を計ろうとし、逆にそれを増長させている。今日、それは、彼らの部落問題に対する態度、方針に典型的に示されている。日本共産党の現代修正主義への転化によって、これとさっぱり訣別し、新たな革命党を建設し、マルクス主義の旗の下、断固として闘うことが、わが国における共産主義者の不可避の任務となった。

以上、日本プロレタリアートの当面する政治的任務を提起するに当って、第二次大戦後の諸階級の国際的な相互関係とわが国の社会的発展段階、それを基礎として、国家を中心とした諸階級の相互関係の総体を簡単に客観的に提起した。勿論、この提起は、綱領の前半部で示されているマルクス主義の根本思想、資本主義に対する科学的批判、唯物史観、国家に関する学説等と現代世界の歴史的発展段階の分析を基礎にして首尾一貫してなされている。

三、続く綱領の実践的部分に於ても、プロレタリアート独裁の観

日本プロレタリアートが、かかる社会革命を首尾一貫して遂行するためには、先ず第一に中央集権的な膨大な官僚軍と近代装備による自衛隊、警察等暴力装置からなる今日のブルジョア独裁の国家機構を打倒し、粉砕し、わが国におけるアメリカ帝国主義の反革命支配を一掃し、プロレタリアートの独裁権力を闘いとらねばならない。日本プロレタリアートの当面する中心的政治的任務は、およそこれ以外ではありえない。

世界プロレタリア共産主義革命の一環として、日本における革命を勝利させるためには、社会主義を小ブルジョア的に歪曲し、労働運動を社会改良のみにおし止め、ブルジョアジーの召使いとして立ち働いている社会民主主義派、及びマルクス主義の完全な修正、底なしの墮落をはかっている日本共産党―現代修正主義派と断固として仮借なく闘い、労働者階級の多くを、こうした日和見主義の影響から切り離さなければならぬ。

今日わが国では社会民主主義派は、社会党によって代表されている。この潮流は、今世紀の初頭、労働運動内部で国際的に台頭した日和見主義と社会排外主義の影響を受けついでいる。それは共産主義に敵対し、社会主義の美名の下に修正主義と安手のヒューマニズムを一貫して売り込んでいる。

日本共産党は、一九五〇年代後半から六〇年代前半にかけて、完全に現代修正主義に転化した。彼らは、労働者階級の階級的立場、利益を擁護し、貫徹するのではなく、これを曖昧にし、なげ捨て、小ブルジョアの立場と利益を強調し、代弁する。彼らは、マルクス主義の核心たるプロレタリアート独裁の思想を完全に投げ捨てた。彼らは、プロレタリアートの真の国際的利益をおし貫き、世界革命の前進に貢献するのではなく、一国主義、民族的利己主義、排外主義に陥っている。それは、日本帝国主義の急速な復活、対外侵略を軽視し、今日の日本の国家権力が、主に、わが国の金融資本の手中にあることを否定し、このブルジョア独裁国

点が全体を貫いている。この部分、即ち、「一般的政治的分野で」「部落解放の分野で」までについて、次の諸点に特に留意すべきであろう。

(i) 綱領は、労働者階級の解放の不可欠の条件は、プロレタリアートの階級独裁であること、また、日本プロレタリアートの当面する政治的任務は、プロレタリアート独裁を打ち立てることをはっきりと宣言している。その核心は、ブルジョア国家機構を解体し、プロレタリア国家機構に代えることであつた。

だから、ブルジョア国家機構を解体したならば、日本プロレタリアートは、いかなる国家を打ち立てるのかを、またいかなる社会変革を行うのかを具体的に問題としなければならぬ。同時に、社会革命を前進させるための及びプロレタリアートが、他の被搾取労働大衆を導いてゆくための具体的な指針が提起されなければならない。

プロレタリアート独裁の政治形態は、一八七一年、パリコミューンを初めとし、ロシア革命、中国革命のなかで具体化され発展させられてきた。我々は、その歴史的な教訓を踏まえ、「労働の経済的解放をなしとげるための、ついに発見された政治形態」(マルクス)であるコミューン型国家の諸原則を、この項全体の基礎とし、具体的に貫かなければならない。これが第一であり、この項全体の中心である。

(ii) 第二は、プロレタリアート独裁を打ち立てるために、各分野での宣伝、煽動の規準、骨格を鮮明に、分り易く提起すること。

これらの部分は、政治的民主主義を闘いとること、経済的な、社会的な改良の要求を含んでいる。しかしそれらは、労働者階級を先頭とした被搾取労働大衆の解放の力、反抗の力を強化するために、即ち、プロレタリアート独裁の樹立を容易にし、促進するために、不可欠のものである。それらは、プロレタリアート独裁の樹立に完全に従属させられている。



このことを、誤解の余地なくはっきりさせるために、改良主義的な曲解を寸分も許さないように、綱領は、その最後でこう述べる。

「……党は、……プロレタリアート、被搾取労働大衆に対する官吏、警察の後見をすこしも拡大するか、あるいは打ち固める結果となるようないさかいの改良主義的計画を断固として拒否する。——中略——党は以上の政治的、社会的諸任務の完全な首尾一貫した遂行は、わが国のブルジョア独裁権力を打倒し、アメリカ帝国主義の対日侵略反革命支配を一掃し、プロレタリアート独裁を樹立することによってのみなしとげることができると固く確信する。」

我々が綱領の不可欠の一部分として提起した最小限綱領に関しては、わが国の労働運動内に、決定的に誤った三つの傾向がある。それは、(一)最小限綱領を、プロレタリアート独裁を打ち立てることに完全に従属させるのではなく、単なる改良要求を羅列するものとして存在し、(二)綱領に最小限綱領は不用とする傾向としてあり、(三)最大限綱領と最小限綱領とを無媒介に切り離す傾向として存在する。

最初の傾向は、全くの改良主義であって、労働者階級の解放闘争を発展させるのではなく、反対におし止め、この階級全体を、より長く、より強く、ブルジョアジーの支配下につなぎとめておくための役割を果たす。こうした傾向は、権力問題を曖昧にし、忘れ去り、只大衆運動にのみ受動的に奉仕している共産主義分派やサークルに一般的である。と同時に、この方法は、ブルジョア議會を通じての革命と結びつけられることによって、労働者階級を完全に裏切り、労働代官として、また客観的に資本の召使いとして立ち働いている日共、現代修正主義や社会民主主義派のものなのである。彼らは正に、「官吏、警察の後見」を格大し、打ち固める結果となる改良主義的計画に熱中している。

客観的分析が、直接の基礎とされている。我々は、ここでも階級闘争の具体的構造を考慮しなければならぬ。

そうではなく、マルクス、レーニンの起草した、又は手を加えた綱領を、ここで丸写しにするならば、それは単に書き写しであって、わが国の革命闘争の具体的な、実践的な闘いの規準とはならないだろう。確かに、我々は、ここでも(どこでも)マルクス主義の、基本観点、諸原則を土台に据えなければならぬ。しかし、ここでは、とりわけわが国の、又現代世界の階級闘争に、それを具体的に適用することが重要であって、ここでも、丸写しをし、只オウム返しにすることは、丁度坊主が経文をとなえるようなものなのだ。

## インドシナ革命戦争の大勝利万歳！

四月十七日、カンボジア労働者階級人民は、カンボジア民族統一戦線の下でフノンペンを解放した。

そして今日、四月三十日、ベトナム労働者階級人民はホー・チミン市と自ら命名したサイゴンを解放した。インドシナにおける革命戦争は、今、劇的な勝利をおさめた。米帝を筆頭とした国際帝国主義は手痛い敗北を喫した。米帝・ソ連社帝主導の平和共存・世界支配、及び利権の現状維持は革命によってまさに打ち砕かれつつある。

我々はこの勝利を熱烈に祝い、連帯の意を表明するものである。この勝利は、一八六二年以降のフランス、日本、再度フランス

第二の不要論は、主に、左翼的空論主義者たちのものである。つまり、アナキズムやテロリズムに代表され、その影響下にあらる勢力に他ならない。彼らは、最小限綱領を往々に無視する。そののみならず、それに抗議する。勿論、彼らは、最小限綱領を最大限綱領から首尾一貫して提起することもできない。それは、彼らが単にそれを不用と考えているだけからではなくて、彼らが、階級支配の具体的構造について知らないからであり、その総体に目が行き届かないからであり、労働者階級の解放を実際にし遂げる方法とその準備について深く考えてもみないからであり、かつ、解放は、労働者階級自身によってのみなされることを認めないからである。

我々は、現実から出発するのであって、勝手な思い込みから出発する訳にはゆかない。ところで、今日の日本は、資本主義社会であって、我々は、これと格闘し、これを打倒しなければ先へ進むことはできない。だから資本主義の抑圧の一切のあらわれと首尾一貫して、粘り強く、系統的に闘うことなくして、労働者階級を肉体的、精神的な摩滅から防衛し、その解放の力を強めることなくして、資本主義を打ち倒すことなどおおよそできない相談であろう。

最後の傾向は、およそ政治的に首尾一貫しない主張の産物である。そこでは頭では、共産主義の原則的な見解が支配的だが(実際は一見そう見えるだけだが)尻尾では、改良主義の諸要求が羅列され、単なる思いつきのたうっている。それは、詰まるところ折衷であって、雑炊なのである。綱領において、そこで展開されている原則的見地と実践的部分とが、完全に首尾一貫していないならば、それは戦う党の旗印ではなく、小ブルジョアジーの動揺する勢力の思想的な政治的な実践的な動揺と分解の見本となることになろう。

(一)綱領の実践的部分では、日本における諸階級の相互関係総体の

(六〇頁より続く)

命を主張してきたことも又、この様な傾向の典型的な現われといえる。米帝と「日本民族」との民族矛盾が主要である。などという主張の誤りについてはあえてここで批判するまでもない。そして実はこの様な傾向は、綱領の原則的部分に対するマルクス主義の見地に一貫して立脚してはいないところからきている。

そしてアメリカによる百余年間にも渡った植民地、半植民地支配からの決定的な完全な脱出である。

仏帝国主義のベトナム・インドシナ支配は一八六二年に始まった。第二次大戦のなかで、強盗たる仏。日はインドシナの植民地支配の主導権を争った。かかる植民地支配に対するベトナム・インドシナ人民の反抗は粘り強く断固として闘われた。一九三〇年創立されたインドシナ共産党に代表される労働者階級人民は、いち早く解放闘争の主力となった。彼らは四五年ベトナム人民軍を組織した。

一九四五年八月、ベトナム人民の蜂起が日本帝国主義の侵略を

おしのけ、ベトナム民主共和国（ホー・チ・ミン主席）が打立てられた。だが直ちに仏帝は戦前の特権の回復をめざした。この再侵略は、ベトナム人民の全面戦争をもって向えられた。世界の憲兵たる米帝は仏再侵略におしめない援助を与えた。こうした情勢で、不屈のベトナム人民が、ブルジョアジーの階級支配の維持・防衛を世界的な使命と任じ戦後全世界に軍隊を派遣し、反動の盟主となった米軍と、早晚全面対決することは避けられないであろう。革命と反革命の激突が繰り広げられ、インドシナはその主戦場となる。

五四年、五五昼夜に渡る大攻撃の後、仏軍がディエンビエンフーで完敗した時、それは現実のものとなった。米帝の全面介入が、ジュネーブ平和条約に保障された民族の自決・統一を足げにすることから始まった。米帝によって、その精兵五〇万が派兵され、完全な制空下での無差別爆撃が繰り返され、かいた政権へのありとあらゆるテコ入れがされ、戦費一五〇〇億ドルが投入された。だが、それも戦うベトナム人民の前には無意味であった。米軍は敗退を重ね、バリにおける和平協定の締結によってみじめに撤収した。和平協定は、米帝とそのかいらいにとって瞬時の均衡をもたらしたに過ぎない。それは、革命勢力の完全勝利への一の跳躍台となった。

こうして、ベトナム・インドシナに侵略し、労働者階級人民の闘いを押しつぶさんとした列強は、ここにことごとく撃退されたのである。侵略・反革命、腐敗、墮落、低滞は、輝かしい民族解放と社会主義にとって変えられた。革命的な統一なベトナムが、またインドシナが直ちに打ち立てられるであろう。世界プロレタリア共産主義革命の一大飛躍が果された。

かかるベトナム・インドシナ人民の勝利は民族解放・社会主義の勝利と帝国主義・反動勢力の敗北、没落とを比類のない明確さで立証した。それは、まさに歴史的大法則である。

六十年代、全世界の共産主義者、革命勢力は米帝に非和解的に闘う不屈のベトナム人民に鼓舞され、勇気づけられた。ベトナム革命戦争は全世界各地で帝国主義の侵略・反革命に対する反抗を強化した。全世界でベトナム反戦闘争が、革命戦争に対する支援がもり上った。この闘いは帝国主義の屋台骨を揺がした。

この時から、ベトナム・インドシナ革命戦争は、民族解放と社会主義革命の二本であった。それは、当面の世界の主な傾向は革命であることを有弁に物語るあかしであり、民族解放と革命に決起した全ての人々の心の支えであった。この闘いこそ、今日の世界プロレタリア共産主義革命の一大推進翼であった。

キューバ革命の英雄、徹底した国際主義者チェ・ゲバラの「第二、第三の、無数のベトナムを全世界につくり出せ」という有名な名言は、こうした情勢における任務を適確に示すものとなった。

インドシナ革命戦争の大進撃と完全な勝利を目の当りにした今、全世界の革命諸勢力は団結して粘り強く闘い、比類のない勇氣と知謀を発揮して、このような勝利にこそ闘いを導かねばならぬ。

一九七五年四月三十日

1975年 5 月 1 日発行  
**プロレタリア独裁編集委員会**  
編集・発行人 大崎 圭

連絡先 電話 06(658)7491  
東京都千代田区神田郵便局私書箱45号 黎明

頒価 400円